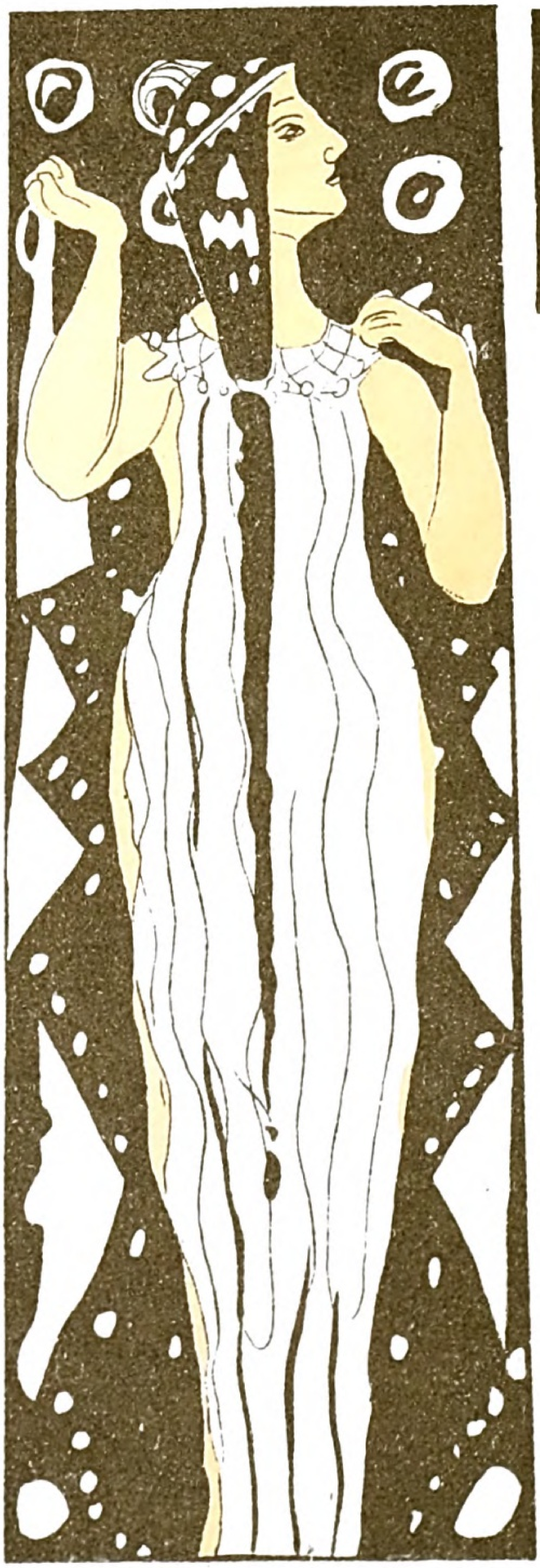
青鞜

明治四十五年八月一日發行（毎月一回一日發行） 第二巻
明治四十四年八月二十八日第三種郵便物認可 第八號



八月號

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

靈性の女(短歌)……一……原田琴
叔父ワーニャ(脚本)……六……瀬沼夏葉譯
葵……(小說)……二三……增田初譯
教會と靈術と鳥と(小說)……二九……人見直
寶玉(短歌)……四六……夏
日盛(俳句)……五〇……白雨

群衆中の人(飜譯)……五四……がオ
夏の日と晝顔(詩)……六六……紅吉
圓窓より(茅ケ崎へ茅ケ崎へ)……七六……らいてう
編輯室より……一〇九……同人
南湖だより……一一一……白雨・紅吉

青鞜

第二卷　第八號

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

魔性の女

われをして魔性女と罵りぬいと心ゆく名とぞおもへる

二三人男を知るを上もなき手柄のごとくおもへる少女

空涙それもこの頬を流れたるものとおもへば時にくやしき

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

俄雨に傘もたぬを驚くに似たり昨日の戀の心
は

花とるに數ふるごときおさなさはわが此頃の
戀に忌むこと

美しき男は來よといふごとく雨にかたぶきひ
なげしの咲く

わがねたみおのれ呪ふにとゞまると淺くも人
の思へるものか

男をば我が世の外のものぞとは今朝の夢まで
知らざりしかな

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

われならぬ人といふことしみ〴〵と覺えぬ君
がうしろ姿に

捨てゆきし煙草のからも何となく心とがめて
泣かれぬる朝

君がゆく後に投げしだありやのなえてたそれ
し我とおもひね

あきれたる涙ばかりがこぼれけり日も夜もひ
とり書を讀むわれ

あな淋しさびしといふが重りて淋しきわれと
なりにけるかな

心多き人といふこそをかしけれうつろの胸と
入るに任せば

さびしとぞなげく男と別れけり若き心にさは
るものゆゑ

文ばかり書き交すをば若き日のいみじきこと
に數へんはうし

黒髮を美しとするおろかしき男のすなる戀も
うれしき

日も月も灯としててれるのみわれらの戀の前
にあるとき

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

かたはらに君のおはすにいとつよく思ひあがりて見たる夜の月

おもしろく別ればなしをするまでに君と我とのうつくしくなる

——原田琴——

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

脚本

叔父ワーニア（承前）

第四幕

イワン・ペトロキチの居室。其處には寢臺もある帳場もある。窓に倚せて大きい机が置かれ、其上には所有地の收入や、支出の決算簿があり、紙や其他の品が並んでゐる。又帳場の机と、戸棚と、秤などがある。それからもう少し小さい机が一脚、これはアストロフが繪を書く處で置いてあるので、其上には繪具や、紙挾などがある。山雀の籠が懸けてある。壁には誰にも用のないやうな亞弗利加の大きい地圖が懸かつてゐる。大きい長椅子にはゴム引の布が張つてある。左の方の戸口は、他の室に通じ、右の方の戸口は直ぐ玄關に出られ、右の戸口の前に靴拭の敷物がある、農夫等が汚れた靴のまゝで入つて來ないやうに。秋の夜で四邊は靜である。

（テレエギンとマリナとは對坐(むかひあ)つて、スコツチの毛糸を、テレエギンは手に掛け、マリナはそれを卷いてゐる。）

テレエギン。さ、早く遣つてお了ひよ、もう今お別れに招(よ)ばれるだらう、もう馬も附けるやうにつて言付けたから。

マリナ。（糸を卷く手を急ぐ）もう少しだよ。

テレエギン。ハリコフへお立ちになるのださうだよ、而して彼處でお暮しなさるのださうだね。

マリナ。其の方が増さ。

テレエギン。エレナ・アンドレエウナ樣が喫驚して了つたのさ、さうしてもう一時だつて這麼處には

暮されないと言ふのだ。ハリコフに二時足を止めて、而して其處から荷物を取りに人を寄越すとかだよ、て、まづ今空身て出立するのださうてね、して見るとねえ、マリナ・テモヘエウナ樣、此處には彼の方々は暮せない運命なのだよ、これもどうも運命だと見えるねえ。

マリナ。其の方が可いとも、可いとも、まあ先刻の騷と云つたら、ピストルなんぞを打出してからに、い丶恥晒しだ。

テレエギン。左樣です、まるてアイワゾフスキイの繪を見るやうてしたな。

マリナ。ふん、見るのもいやだよ（間）又是からは舊のやうに皆なる、朝にや八時にお茶、さうして一時にはお中食、夕方にはお夕飯と、もうちやんと人並の時々に食べるやうになる……ハリスチアンらしく（溜息をする）暫くもうラプシヤを食べなかつたよ。

テレエギン。さうさ、もう大分暫くラプシヤを食べなかつたなあ、（間）暫く……今朝ねマリナ・テモヘエウナ樣、私村に行つたらば後から何處かの商人の奴が恁う云ふのよ。「やあい、此の居候！」てさ、隨分厭な氣持がしたよ。

マリナ。氣に懸けないがい丶さ、何お前樣、皆神樣の前には居候だわな、お前樣だつて、ソーニヤ樣だつて、イワン・ペトロヰチ樣だつて、だけんど、誰も何にも爲ずにはゐないんださ、何か皆それ〳〵に仕事をしてゐるだ、皆それ〳〵の仕事を……うむ、ソーニヤ樣は何處だな？

テレエギン。庭にドクトルと一所にイワン・ペトロヰチ樣を探してゐなさる、若しやイワン・ペトロヰ

チ様が自殺でもしやしないかと思つて。

マリナ。だがね、ピストルは何處にあるんだね？

テレエギン。（小聲で）私が穴藏に隱して了つたのさ。

マリナ。（笑ひながら）可笑いことなあ！

（外の方からチイニツキイとアストロフ登場）

ヲイニツキイ。止しなさい。（マリナとテレエギンに）彼方へ少し行つて下さい、まあ何卒一時間でも、一人で置いて下さい！世話を燒かれる位厭なことはない。

テレエギン。はい〳〵只今。（爪先にて歩みながら退場）。

マリナ。雁が……ガア〳〵〳〵！（毛糸を沒つて退場）。

ヲイニツキイ。止してくれ！

アストロフ。可しい。僕だつてもう疾うに此所から歸らなけりやならん處なんだ。たゞもう一度云ふが、僕に渡すべきものを渡してくれ給へ、てなければ歸られんぢやないか！

ヲイニツキイ。我輩君から何も取らんと云ふのに。

アストロフ。冗談は置いてだよ、君、引止めないで呉れ給へ、僕あとうに歸らなけりやならんのだから。

ヲイニツキイ。何も僕は取らんと云つたら。

（二人は椅子に掛る。）

アストロフ。ふん、ぢや少時待たう、さうして後にたとひ腕力に訴へても奪はんけりやならん、君をふん縛つて探すから。よう君、全く僕は本氣で云つてるのだと云ふのになあ。

ヲイニツキイ。奈何でもいゝ（間）這麼馬鹿を演つて了つて、二發も打つて一度も當らんなんて！這麼馬鹿氣たことは、自分で自分に許されん、我輩自ら棄て置くことは出來ん！

アストロフ。ピストルで遣りたくなつたら自分で自分の額を打つのがいゝよ。

ヲイニツキイ。（肩を縮めて）。變だ、我輩は謀殺未遂の犯人ぢやないか、それだのに誰も捉へて警察に渡しもせず、又裁判に訴へもせん、して見ると、何かな、我輩は狂人と見られたかな。（苦笑する）。成程、我輩は狂人か、而してあのそこいらのその、偉い學者と博士と云ふ假面の下に、その己の無才と、暗愚と、殘忍とを隱してゐる奴は狂人ぢやないと云ふんか、さうさ、又故意（わざと）老人の夫を有つて、さうして人の目の前でその夫を欺かしてゐる、それも狂人ぢやないと云ふのか。我輩見たんだ、見た、見た。我輩は君が彼女（あれ）を抱いてゐたのを、ちやんと見たんだ。

アストロフ。左樣（さやう）で御座います、如何にも抱きまして御座りますッ。あ、どうだ君、（兩手で鼻を高くする）。

ヲイニツキイ。（戸の方を眺めて）。いゝや、這麼狂人どもを支へて行く此の天地が氣が違つてるのだ、即ち此の地上が狂人だ！

アストロフ。何だ馬鹿な。

ヲイニッキイ。さうさ、我輩は狂人よ、馬鹿ものよ、それだから馬鹿なことを云ふ權利があるんだ。

アストロフ。さうぢやないんだ、君は狂人ぢやなくつて、變人さ、道化ものだ、前にや僕は變人と云ふものは、一種の病人、通常でない人間と思つてゐたが、然し今日では思想が別になつた。最も人間らしい人間は、唯だ變人がそれだと悟つた、君はその全くの變人さ。

ヲイニッキイ。（兩手で顏を掩ふ）。慚愧の至りだ！君にや解せんよ、我輩はあゝ如何に羞ぢて居るか！這麼強い羞の苦痛は、甚麼身體の疼痛よりも、更に、更に甚しいものなのですぞ。（頽然として）。あゝ、奈何したらなあ？（身を屈めて机に頭を持たせる）奈何したら可いのか？

アストロフ。何でもないさ。

ヲイニッキイ。何か我輩に與へてくれ、何か！あゝ……今我輩は四十七歲、若し假に六十歲まで生るとしたら、まだ後十三年も殘つてゐる、長いなあ！奈何して此の十三年を甚麼風に生活して行かう？この年月を何をして何で塞げて行かう。（悶躁てアストロフの手を握る）。ねえ、解るかい然し若し何か新しく餘生を暮すことが出來るとすれば……恁う朗な、靜な、暖な朝に目を覺して、是迄の生活はもう烟のやうに消えて、忘れて、まるで新しい生活を初めたと感じたならば（泣く）。新しい生活に移るか……なあ、奈何云ふ具合に初めようか、なあ君、敎へてくれい君……其麼ことから……

アストロフ。（殘念さうに）。何が君に！甚麼新生活！我々の生活は君と云ひ、僕といひ、皆もう望のな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

い生活に過ぎんのだ。

ヲイニツキイ。さうか？

アストロフ。さうとも、那樣ことは分り切つてゐる。

ヲイニツキイ。何か呉れ……（心臓の邊を彼に示しながら）あゝ胸が恁う燒附きさうだ……

アストロフ。（眞面目に叫ぶ）。止めなさい！（又急に優しい調子になつて）百年か、二百年我々の後になつてからの人間、即ち我々の這麼馬鹿らして生活と、無趣味な生活とを以て、乾度嘲笑するんだらうと思ふその人間は、ひよつとしたら幸福と云ふものゝ道を見付けるかも知れない、が然し、我々は……我々君や、僕にやたゞ一つ望があるばかりだ、此の望は我々の棺桶に横はる時だ、此の時にひよつとして、何か自分に快よい幻影を見るかも知れないさ。（溜息をして）。なあ君、まづ此の郡内に於て、ちやんとしてゐる人間は、たゞ君と、僕さ。然し十年も經つか經たん中に、下らん輕蔑すべき田舍の生活に、我々は沈ませられて了ふのだ。其の腐つた蒸發氣で我々の血を害されて了ふ。て遂には、我々も他の奴等と同じやうな俗物と化して了ふのだ。（元氣よく）然し君はもう那樣下らんことを云ふのは止し給へ、それよりもまあ僕に取つたものを返してくれ給へ。

ヲイニツキイ。我輩は君から何を取らん。

アストロフ。君は僕の旅行用の藥箱の中から、モルヒネの壜を取つたらう。（間）。なあ、聞き給へ、奈何しても君は自殺がしたかつたら、林にでも行つて其處で遣れ、だがモルヒネは返し給へ、て

ないとね、死でから後が面倒だ、いろ〳〵な邪推やら、疑問やらが百出して、僕が君に劇薬を與へたのだと云はれるだらう……僕にや君を解するだけでも澤山だ……まあ君も考へて見るがいゝさ、這麼ことは面白いかね？

（ソーニャ登場）

ヲイニツキイ。止し給へ。

アストロフ。（ソーニャに）ソヒヤ・アレクサンドロウナ様、貴方の叔父様は僕の藥箱の中からモルヒネの壜を引出しました、而して僕に返してくれんのです、何卒貴方一つさう有仰つて見て下さいませんか、こりや餘り利口な考ぢやないでせう、而して僕もうさうしてはゐられないのです、とうに歸らなけりやならんのですから。

ソーニャ。叔父様、貴方モルヒネをお取りなすつて？（間）。

アストロフ。取つたのです、僕よく知つて居るですよ。

ソーニャ。お出しなさい叔父様、貴方は那様ことをして奈何して私等て威しなさるの。（優しく）お寄越しなさい、ようワーニャ叔父様！私だつて貴方より不幸でない譯でもないぢやありませんか、だけど私失望して了ひません、私は我慢しますわ、自分の生活のお終まで我慢しますわ……叔父様も我慢をなさいよ。（間）。さ、お寄越しなさい！（彼の兩手を接吻する）大事な、可愛い、好い叔父様！（泣く）貴方は親切て、毎も私等を可哀さうに思つて下さるのよ、ねえ叔父様、さ、下さいよ、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

よう我慢をしてね、我慢をして、よう叔父様。

ヲイニツキイ。（机の抽斗から空壜を出してアストロフに渡す）。さあ、取り給へ！（ソーニヤに）ぢやもう早く仕事を初めやう、早く何か仕事を、でないと遣り切れん……到底遣り切れん……

ソーニヤ。さう〳〵仕事が一番ですわ、お父様を見送つたら、すぐ仕事に取り掛りませう……（神経的に机の上の紙を弄る）。私等長い間棄てゝ置いたのだから。

アストロフ。（壜を薬箱に納めて革紐を締る）。さてこれで出掛けられる。

エレナ・アンドレエウナ。（登場）イワン・ペトロヰチ様、貴方此處？私達只今出立致します、でね、何かアレクサンドルが貴方に申上げたいつて申ますから、些と彼方へゐらしつて下さい。

ソーニヤ。ゐらつしやいよ。ワーニャ叔父様、（チイニツキイの腕を取る）。行きませう、さあ、お父様は乾度貴方と和睦をなさらうと云ふのでせう、そりや必要ですわ叔父様。（ソーニヤとチイニツキイ退場）

エレナ・アンドレエウナ。私もう出立致します。（手をアストロフに出す。）

アストロフ。もう？

エレナ・アンドレエウナ。馬をもう附けるやうに言付けました。

アストロフ。ぢや左様なら。

エレナ・アンドレエウナ。今日私貴方とお約束致しましたよ、あの、貴方もお歸り下さるのをね。

アストロフ。さうです、只今歸ります。（間）。驚いたですか。（彼の兩手を捉る）。然しこれが那

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

様に怖いのですか。

エレナ・アンドレエウナ。ほんとうに貴方は笑しい方ね……實は私貴方には怒つてゐるのですが、それでも……貴方のことは快よく思ひ出します、貴方はほんとうに面白い、さうして變りものでゐらつしやるわね、思へばもうこの後二度と貴方にはお目に懸られませんもの、私何を貴方に隱しませう、私だつて貴方を實は好で御座いましたの。さあそれぢや握手致しませう、お互に親友になりませうね。どうぞ皆惡しからず思召して下さい。

アストロフ。（彼女と握手する）。ぢやお立なさい……（考へながら）どうも變ですよ、奈何見ても貴方は心の良い方でお出でのやうだけれど、貴方と云ふもの全體に於て、何か恁う變な、解し惡い所があるです、と云ふのは恁うです、貴方々御夫婦が此處へお出でになつてからは、今まで此處にゐて勞働し、仕事をしてゐたものが、皆仕事を棄てゝ了はんけりやならんやうになつて、さうしてあの足痛風の貴方の夫と、貴方との爲に、唯勤めてゐる、たゞ二人に貴方と、貴方の御良人とに。さうして其上に貴方々の怠惰が皆に傳染して了つたのです、現に僕です、御覽なさい、恁う夢中になつて、全一ヶ月もう仕事を棄てゝ了つてゐるのでせう、其中には病人も新しく出來る、自分の林の植付け場には、農夫どもは牛や豚を勝手に放してゐると云ふ始末です。まあ、何にしても貴方々お二人で、何處へお出でにならうとも、乾度其處に破壞と云ふものを播いて行かれるのです。無論これは冗談ですさ、然し其れにしても……變です。僕はさう思ひます、正直な所、若

し貴方々が此所にもつと長くお居てゝあつたらば、もつと甚麼酷い破壞が持上つたか、それこそ終には皆粉微塵になつたでせう。僕も無くならうし、貴方も乾度危かつたでせう。さあ御出立なさい。Finita la comedia

エレナ・アンドレエウナ。（机の上から彼の鉛筆を敏捷く取つて匿す）。此の鉛筆私頂戴致しますよ、記念に。

アストロフ。妙ですなあ……知人であつたものが、俄に何だか……さうしてもう是切り遇ひもせんことになる。世の中は皆恁うしたものかなあ……今誰も人の居らん中、ワーニャ叔父様も今度は花束を持つて來ん中に、どうか僕に……貴方に一度の接吻を許して下さい……お別れの……あ？（彼女の頰に接吻する）。あゝ、まあ……これでよかつた。

エレナ・アンドレエウナ。どうぞ御機嫌よう。（振返つて見て）。あゝ、どうせ一生にたゞもうこれぎりなのだ！（彼女は彼を抱く。而して一分間に二人とも迅速に離れて了ふ）。さあ、出掛けなけりやなりません。

アストロフ。成べく早くお出掛けなさい。若し馬の用意が出來たのなら。

エレナ・アンドレエウナ。此處へ誰か來るやうですね。（二人を聞耳が立てる）。

アストロフ。Finita！

（セレブリャコフ。チイニツキイ。書物を持つたマリヤ、ワシリエウナ。テレエギン。ソーニャ登場）。

セレブリャコフ。（チイニツキイに）。舊いことを思出すものは、眼のくり玉を抉くるぞですよ。あの騒のあと、まだ何時間もたゝないが、隨分私は悟りもし、思ひもしたのさ、人間は奈何云ふ風に世の中

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

に生活しなければならんと云ふもう一部の論文を書いて、後世に殘すことも出來る。私は喜んで君の詫をお受けするばかりでなく、私からも君にお詫を申上げます。さて、それぢや左樣なら……

……

（チイニツキイと三度接吻する）。

ヲイニツキイ。皆ちやんと舊のやうに相變らず總てを貴方にお送り致します。

（エレナ・アンドレヱウナはソーニヤを抱く）。

セレブリヤコフ。（マリヤ・ワシリエウナの手に接吻する）お母樣……

マリヤ・ワシリエウナ。（彼を接吻しながら）。アレクサンドル樣、貴方どうぞもう一度寫眞を撮つて、是非送つて下さい。ほんとうに私の爲には貴方は大切な人ですよ。

テレエギン。左樣なら、御機嫌よう閣下！どうぞ我々をお忘れ下さらんやうに！

セレブリヤコフ。（娘を接吻する）。左樣なら……皆樣左樣なら！（アストロフにも手を伸べる）度々お出で下さいましたのを深く謝します……私は貴方の御思想と、貴方の御熱心と、貴方の御方針とを大に尊敬致します、而してお別れに臨んで皆樣にたゞ一言、此の老人が置土產として、申殘したいのですが、それは皆樣是非仕事をなさらんては可けませんと云ふことです。是非仕事をして下さい！（皆に禮をして）それぢや御機嫌よう！（退場。その後に續いて、マリヤ・ワシリエウナとソーニヤも退場）。

ヲイニツキイ。（エレナ・アンドレヱウナの手に熱き接吻をしながら）左樣なら……失敬致しました…もう何時にも

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

お目には懸らんでせう
エレナ・アンドレエウナ。（感情を籠めて）。左様なら貴方。（彼の頭を接吻して退場）。
アストロフ。（テレエギンに）ワップル君、些と彼方へ行つて云つて呉れませんか、序に。僕にも馬を附けて呉れつて。
テレエギン。はい承知致しました。（退場）。
（アストロフトとヰイニツキイばかり殘る）。
アストロフ。（机の上の繪具など取片附けて、それを鞄の中に入れる）。奈何して君は見送りに行かないのか。
ヰイニツキイ。なあに搆ふもんか、さうして厭だ……何だか氣持が惡いから。何でもいゝから早く仕事を初め出さう……仕事だ、仕事だ。（机の上の紙を掻廻す）。
（間。やがてりん／＼と鈴の音が聞える）。
アストロフ。プロフエッサーは何か喜ばしさうであつたなあ、今はもう其麼囮(をとり)を懸けたつても此所へは遣つて來るもんぢやない、愁々したらう。
マリナ。（登場）。お立ちなさつただ。（腰掛に掛けて靴下を編む）。
ソーニャ。（登場）。もうお立ちになりましたわ。（眼を拭く）。どうぞ御無事でお着きになるやうに。（叔父に）。さあ、仕事を何か叔父様お爲せ下さい。
ヰイニツキイ。仕事だ、仕事だ……

ソーニヤ。あゝもうなんて暫らく、此の机の自分の席には寄らなかつたらう。（机の上にランプを點る）インキは大方無いだらう……（インキ瓶を取つて、戸棚の所に行つて、彼方からインキを注ぐ）。あゝ悲しい。あゝもうお父樣達はお立ちになつて了つたんだ。

マリヤ・ワシリエウナ。（ゆる〳〵と歩みながら登場）。あゝ立つた！（腰を掛けて一心に讀み初める）。

ソーニヤ。（机に向つて決算簿を一枚々々に開いて見る）。書きませう、ワーニヤ叔父樣、何よりも先に勘定をして見ませう、酷く放擲になつてゐますよ、今日も勘定の請求に人が來ました。さあ、初めませう貴方は此方のをお調べなさい、私は別の方を調べますから。

ヲイニツキイ。（書く）。勘定……えゝと……（二人は默して書く）。

マリナ。（欠をする）。あゝ眠くなつた……

アストロフ。靜だ。ペンの走る音と蟋蟀の聲ばかりだ、暖くてあゝ可い氣持だ……歸るのが厭になつた。（馬鈴が聞へる）おゝもう馬車が出來た……さあ、貴方々に御挨拶をするのと、僕の机に左樣ならをするのと、もう其切りだ！（地圖を紙挾に入れる）。

マリナ。何んだつて那樣に急ぐのさ、旦那、もつと御緩りとなさいまし。

アストロフ。いゝや、さう行かないんだ。

ヲイニツキイ。（調べながら）先分の殘金二圓七十五錢

（勞働人登場）

勞働人。ミハイル・リウォーヰチ樣、馬車が出來まして御座ります。

アストロフ。ウム、さうか。（旅行用の藥箱と、鞄と、紙挾とを彼に渡す）ぢやこれを取れ、紙挾を汚さんやうに氣を着けろ。

勞働人。畏まりました。

アストロフ。さてそれぢや……（別れやうとして立上つた）。

ソーニヤ。いつお目にかゝれませうか？

アストロフ。夏までは多分もうお目にはかゝられんでせう、冬にはとても奈何も。然し何か御用でもお有りの節は、些とどうぞお報せ下さい、すれば早速參ります。（手を握る）。御馳走樣でした、いろ〳〵有難う御座いました。（乳母の所に行つて、彼女の頭に接吻して）。左樣なら老婆や。

マリナ。お茶も上らないで、其儘で？

アストロフ。いや欲しくありません。

マリナ。ぢやウオトカでも。

アストロフ。（曖昧に）さうさね……

（マリナ退場）

アストロフ。（間を置て）。僕の側馬だが、何だか片足惡くなつた、昨日ペトルシカが水をくれに行つた時、氣が着いたが、何だか跛を引いてたやうだつた。

ヴイニツキイ。蹄鐵を取換へなけりや可かんだらう。

アストロフ。ロジデストウエンヌイ村で、鍛冶屋に寄らなければなるまい。（壁に懸けてある亞弗利加の地圖の所に行つて、地圖を見ながら）。亞弗利加なんざあ、今時分は甚麼にか恐しい暑さなんだらうな。

ヴイニツキイ。さうだらう、多分。

マリナ。（ウオトカを注いだ盃と、パンの一切を持つて登場）さあ、召上れ。

（アストロフはウオトカを飲む）

マリナ。旦那の御健康を祈ります。（頭を卑く垂れて挨拶をする）。

アストロフ。いや僕は恁うなんだ……それぢや御機嫌よう！（マリナに）送らんでも可いよ老婆や、要らんよ。

（アストロフ退場。ソーニヤは彼を見送らんとて蠟燭を持つて、彼の後に尾いて退場。マリナは自分の椅子に腰を掛けた）。

ヴイニツキイ。（調べて書いてゐる）。二月二日に油（植物の）を二十斤……又二月十六日に油を二十斤……蕎麥を……

（馬鈴が聞える）

マリナ。あゝ出掛けた。

（間）。

ソーニヤ。（登場。机の上に蠟燭を置く）。お歸りになりました……

ヲイニツキイ。（勘定を調査して書いてゐる）總計……十五……二十五……

（ソーニヤは椅子に掛けて書き初める）

マリナ。（欠伸をする）。皆我々の罪なのさ。

（テレエギン登場、爪先で歩いて戸の側に腰を掛け、靜にギタラの調子を合せる）。

ライニツキイ。（手でソーニヤの頭を撫でながら）。可愛いソーニヤ、實に俺は切ない、堪らんよ。若しお前に此の心が分つたら、此の俺の心が！

ソーニヤ。だつて仕様がないぢやありませんか！生活をして行かなけりやならんですもの。（間）。左に右、私達はねえ、ワーニヤ叔父樣、生活をして行かなけりやならないぢやありませんか。長い幾日と、長い幾晩とを住み通しませう。而して運命が私達に遣す艱難や、辛苦を我慢しませう、さうして他人の爲に盡しませう、ねえ叔父樣。今でも、後でもいつもね、休まないで、私等に死期の來るまで。さうして其時には私等は安らかに、反抗ずに死にませう。死んで行つてから、私等は彼の世で訴へませうよ、私等は苦みました、泣きました、苦味い生活で御座いましたつて。すれば神樣は屹度可哀さうに思召して下さるでせう私等を。其時にはねえ、私思ふわ、よう叔父樣、可愛い叔父樣、ねえ、屹度光明な、華々しい、審美的の生活を見ますわ、さうして私等其時初めて喜ぶことが出來ますわ。また今の恁うした不幸の時を、深い〳〵感動と微笑とをもつて、振返つて見るでせうと思ひますわ、さうして後に休息を致しませう。私はほんとうに、ほんとうに

叔父様、これを信じますよ、熱切に、痛切に信じますの……（叔父の前に床に膝を折つて、頭を叔父の手に靠きながら、疲れた聲て）。其時私等は休息しませう！

（テレエギンは靜にギタラを彈いてゐる）。

ソーニヤ。私等は其時に休息みませうよ！其時には、私等は天使の聲を聞いて、金剛石のやうに輝く天を見るでせう、さうして地上の總ての惡と、私等の煩悶とをね、あの全世界を滿さうとする神様の慈憐の中に沈めて了ふのを見るでせう、さうして私等の生活は初めて靜な、優しい、甘い、撫愛のやうな生活となりますわ。私はそれを信じます、固く信じますわ……（叔父の顔から落る涙を自分の手巾で拭ひながら）　おゝお可哀さうなほんとうにお可哀さうな叔父様よ、お泣きなさるの、えゝ……（自分も涙をはら〳〵と落す）。　ほんとうに貴方は御自分の生活の中に、一生涯喜と云ふものをつひぞ味つたことがお有りなさらない。然し御辛抱なさい叔父様、よ、よ、ね、叔父様、御辛抱なさいましね、私のワーニヤ叔父様、ね……私等いまに休息しませう。

（夜番は拍子木を打つ）。

（テレエギンは靜にギタラを彈いてゐる、マリヤ・ワシリエウナは書物の餘白に何かと註を書き入れてゐる。マリナは靴下を編んでゐる）。

ソーニヤ。私等いまに休息しませう！

（靜に幕）　■完■

チエホフ作

瀬沼夏葉譯

妻

シャンドラン氏は良人として何も不平を云へた義理ぢやない。又た、よく人の云ふやうに、自分の廻り合せを不幸だなどゝこぼすことは能きない。何故つて、彼の妻ぐらい理想的な、快活な、可愛らしい、そして機嫌のとり易く、柔順な女はめつたに見當るものではない。その美はしい娘らしい顔に輝やいてる、大きな、すき透るやうな目を見れば、その母親が出産の前に一晩中夢見るやうに數多の星を眺めつくして、そしてやつとその素ばらしい輝きを娘に持たせることが能きたのに異いないとは、誰しも思はれる。その輝く柔かそうな毛、心持卷上つてる鼻、熟した桃のやうな紅の脣、美はしい肩つき、眞珠母のやうな優しい耳、將た又彫刻家を狂喜せしめるだらうと思はれるすらりとした腰や肉附きの善い姿まで一點非を打つべき所もないのだ。

それに彼女は始終愉快氣に若々しい心持に滿ち充ちてゐる。まだ不平な顔をしたことがなく、唯面白そうに常に笑顔をして、互に愛し愛されてるかのやうに力め、家中を小鳥で一杯の鳥籠見たやうにして居る。愚のやうにも見える程斯んな有様であるのに、シャンドラン氏は未だ曾て妻に優しくしたて

とはない。此の愉快氣な家庭を荒野のやうに見向きもせず、新婚旅行の夢新しき中に既に昔の獨身生活の時のやうな態度にかへり、元のやうな餘裕のない生活を續けたのであつた。

それは彼の性質に彼自身より强い或る所があつたからである。彼には、始終戀の的になるが家庭の平和や幸福の犧牲となることを欲せぬ、といふよくある我儘な所があつた。戀の冒險で最後迄來る女はいつでも彼が最も愛したものであつた。そして女の肌着に觸れる刹那、彼の心はそゝりたてられて取りかへしのつかぬことを爲て終ふのであつた。

彼は別段機嫌のとり難い男でもないので、恰も捕へ難い水に魚をあさるものゝ如く、彼は美なるも醜なるもかまはず探し求めて、破廉恥を反つて誇りとし、時としては失敗して或る關係のある嫉妬深い戀人の爲めに一撃を加はされたこともあるが、それでも錯誤や憤怒や柔順や恐嚇に懲りるやうな風はなかつた。彼は自ら手切金などを出すのを肯じない。反つてそうなると一層罪惡に傾いて、戀の誘惑、追求に熱心になるのであつた。

サン・マルテジョウの女店員や女工や、商人の妻といふ妻は皆彼を知つてゐて、自分等の機嫌を取らせる爲めに金を使はせて、彼の戀に答へて居た。公園の高い被いかぶさつてる木の下や、人の知らぬ細い教會の横町で一種の惡魔のやうにも見ゆる薄い神經質な彼の顏を見たとき女等の多くは微笑したり顏を赤くしたりした。或女は彼を嘲笑し、からかつた。そして彼が近附いて來ると逃げて終ふのだ。

彼の友人等は、彼が自己を忘却して終つてるのを氣の毒に思つて、彼を諫めてよく恁んなことを云つ

た。
「君の妻君は何うした、シャンドラン君。妻君が君に復仇してもいゝのかい。」
そのとき彼は只嘲けるやうな又信じないやうな風をして、肩を一とゆり搖るだけてあつた。
妻は實際彼を欺いて居た。尼のやうに信仰篤く道德高く戒を守つて、戀なんてことには履き古しの上靴ほどにも注意せぬ彼女。謎のやうなことには態と氣がつかず常に大聲で笑つて、生活を來るがまゝに送つて行き、訓練された通りに堅く宗敎上の義務を濟ましてゐる彼女。その彼女が良人を馬鹿にし、暗中を彷徨せしめるやうなことをして、良人に復仇して居るとは、あゝ、誰だつて恁んなことを聞いた人は仰天して終ふに違いない。
方々の屋根は赤くならんばかりに熱し、全市街は寂として沈みきつた或る夏の日、シャンドラン氏は提げ箱を手にした二人の小間物屋の女を追ひかけ、町から町へ、口の中で罵り乍ら、手前の方から何でも好きなものを遣るなどゝ叫んで、次第に敎會の方迄來て終つた。二人は逃げまわつて、やつと敎會の中に隱れた。彼も續いて入つて行つた。そして人なき禮拜臺に來て彼は益々大膽になり、家の内の全き寂寞に愈々附け上つて來た。二人は防ぎ逃るべき途を知らず、男の大膽な企てとその接吻とに怖れ戰いて居た。そのとき彼はふと開け放しの戶口から、傍の禮拜堂の懺悔室を見た。
「おい、彼處の方が餘程心持がいゝだらうよ。」自分等の爲めにこんな思ひがけない場所が設けられてあつたと、氣がついたやうに恁う云つて彼はその中に入つて行つた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

けれども二人はす早く、彼が鐵格子の戸を廻さないうちに、自分等の身體を投げかけて戸を押しつけながら、錠を下ろして彼を閉じ込めて終つた。初めは笑談だと思つて彼は面白がつて居たが、二人が大聲で冷笑をあびせかけ、檻の中の猿を見るやうに舌を出したりしたので、侮辱に耐へ兼ねて遂に彼は怒つた。が急に穩しくなつて、出して呉れゝば幾らでも金をやるからと嘆願した。そしてわなに陷つた鼠のやうに逃げやうと力めて見た。けれども二人は彼の云ふことなどは聞かうともせず、態と仰々しく、しとやかに挨拶をして、左樣ならと云ひながら急いで出て行つて終つた。

シャンドラン氏は絶望した。何を爲すべきかを知らないで、只己れの不運を呪つた。終ひに何うなるだらう。誰がその牢屋から自分を出して呉れるのだらう。貨物所の中に忘れられた外套のやうに午後も夜も棄てゝ置かれるのだらうか。彼は錠を破ることは能きなかつた。禮拜堂の役員や堂司の注意を引きはせぬかと思ふと、懺悔室の壁を叩くことも敢て能きなかつた。噫、憎むべき女。こんな惡戯が見出されて知れ渡つたら、世間の人々は彼を馬鹿にし、流行唄を作つたり、後ろ指をさすに異いない。

そうしてるうちに彼は遠くに微かな祈禱の聲を耳にした。自分を遮つてる綠色の羅紗の幕の向ふ側から女の念珠をこめてるやうな數珠つまぐる音も聞えて來た。衣服のけはひ、三化土の上の足音も響いた。

彼は急に息がつまる程喉がくすぐつたくなつて、思はず、くやみをして終つた。それが沈まつてか

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ら、此の不幸な男は誰か禮拜堂の中の懺悔室の方へ登つて來る音を亦も聞いて、胸とゞろかした。誰だか知らぬが其處に跪いて、敎悔師と告白者とによつて違ふ一種の嚴かな調子で鐵格子を叩いたので、彼は急いで釘にかゝつて居た白い法衣を身にまとつて、手巾で顔を隠し、隅の方にすくみながら格子戸を開いた。

それは祈禱を終つて來た一人の女であつた。彼は能きるだけ小供らしく昔の記憶をたどりつゝ答へた。半ば上げられた彼女の顔被とその胸當ての邊りから香ひくるゆかしき香に稍々好奇心を動かして居たのだ。けれども女が一言口をきくや否や彼は氣絶せん許りに驚いた。自分の妻の聲音なのである。彼は懺悔室の壁が頭上に被ひかぶさつてくる下に針のむしろに坐してゐるやうな氣がして、空氣がだん／＼稀薄になつてくるやうに思はれた。

併し今我に復つた彼は、女が何を云ひ出すかと、大なる好奇心と計り難き不安を以て耳傾けた。女はほつと息をついた。明かに何か胸に思ひ餘してるのだ。そして自分の不幸や寂しき生活、良人の無情なこと、自分の周圍に集り來る打ち勝ち難き幾多の誘惑などを語つた。自分が悪いのでないと思ひながらも彼女の良心は重き負擔に苦しむでるやうに見えた。シャンドラン氏は低き柔かな寧ろ猫撫で聲で云つた。

「しつかりなさい。神の子よ。總てを打開けて御話しなさい。神の恵は限りないのだ。恐れずに皆御話しなさい。」

すると彼女は直ぐ、心を煩はしてる總てのことを彼に語つた。深き熱情と希望とが自分を良人の友の一人の腕にすがらせてゐること、毎日その友と相會ふ時の限りなき嬉しさ、その男の堪へ難き迄に優にやさしきこと、又彼女には悦びであり、目的であり、慰安であり、空想であるその罪惡までも語つた。女は激して來て、啜りあげつゝ自分が何を云つてるのかを全つきり分らずに、恰も男の甘き接吻に我を忘れてるかの如く、ぐつたりとして見えた。そして自分の罪惡の許されんことを願つた。その時シャンドラレ氏は最早憤激に耐へ難ねて、大聲で彼女を遮つた。

「いや／＼、馬鹿な事を、そんな笑談があるものですか。……そんなことは自分一人で思つてる事ですよ。」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

可愛想に、シャンドラン夫人は恐怖と驚愕に殆ど失神して終つた。今、二人は、その間の楔をきり離して別々になす宣告を待つてゐるのである。

——完——

モウパッサン

増田初譯

教會と魔術と烏と

……其の家のあつたところは、青い海の望まれる高い位置にあつて、新らしく建てられた教會の白いペンキ塗りの異樣な建物が、どうかすると曇つた空の下に、恐ろしく光つて見えるのであつた。そして其の邊では、此の教會のあつた町は最も繁榮してゐた。

青い海が油のやうに瀞んだ朝には、其の教會の鐘が如何にも眠むそうに聞えた。又、繻子のやうな滑らかな海の胸を、夕暮の風がよろこばしげに抱き締める時には、教會の鐘は何時も快く鳴り初めるのだつた。

其の教會の鐘は、然し、何の位少女に幼い疑惑と、微かな夢幻的な冥想を與へたか知れない。

如何なる日にも此の生々したペンキ塗りの教會に向へば、少女の心に奇異な威壓されるやうな不安の感じが起つた。

不思議は、それだけではなかつた。

其の教會には大きな宣教師が一人居た。よく夕方など教會の扉の前の石段に立つて、兩手を悠うッ

ポンの衣嚢に入れたまゝ、何か思ひ耽つてゐるやうな、髭もじやの顔や大きな姿を、柵の外から眺めた少女の目には、どうしても其の異人は恐ろしい魔法使としか見ることが出來なかつた。

夕食後、從姉と棧橋へ出かけて、黑い煙りをせはしく吐きながら、うれしさうに汽笛を鳴らしては入つて來る汽船を見たり、やがて其の汽船から棧橋を渡つて色々の方面へ默つて散つていつてしまふ樣々な姿をした男や女を、ぼんやり立つて見てゐたりして思はず時を過し、四周の薄暗らくなつて居るのに驚いて家へ歸る途中――しかし何うしても敎會の前を通らなければならなかつた。

其時少女は、從姉としつかり手を握り合つて、急いで敎會の前を駈け拔けるのが例であつた。そうして家へ這入ると初めてホッと輕い溜息が出た。何故といふに、若しも其の敎會の前をぐづぐづして通つたなら、忽ち彼の恐ろしい魔法使の髭もじやな異人に捕へられた上に、二人は直ぐと烏に化れてしまつて、二度と戀しい友達に逢ふことも出來ず家に歸る事も出來ず、小さな籠の中から毎日毎日自分の家の方に向つて、悲しげに啼くやうな身になつてしまふに違ひないと考へたからであつた。

此の位恐れ此の位疑つた敎會の異人さんは實際魔法使でも何でも無かつた。

何日か少女は從姉と連れ立つて、不圖したことから其の敎會の日曜學校へ行き出した。金縁の眼鏡をかけて紫の袴を穿いた若い女の人から、ぎんぎんする發音で讃美歌を敎へられたり、荒唐無稽なキリストの傳記を話して聞かされたりした。けれども少女は成る可く異人の目に付かないやうにこつそりと人の後に隱れるやうにして、息を殺してゐるのだつた。そうしないと直ぐあの異人に見付けられ

て、何んな大變な魔法にかけられてしまふか知れないといふ――とはいへ美しい幼い疑ひに滿ちた少女の不安は、未だ幽かながら心の何處かに漂つてゐるのであつた。

恁麼ことをとりとめも無く心に繰り返しながらも尚其の教會へ二三度續けて行つた。而して意味の少しも分らない讃美歌を無理に歌はせられ、例の眼鏡をかけた女の人から「お母さんだけで生れた」キリストの話を聞かせられるのは、眞實に厭だつたが、歸りに美麗な色彩を施した繪札と赤い西洋花を貰ふのがうれしく樂しみであつた。

其の繪札を五枚ためると、多くの異樣な服裝をした男女が道に跪いて、手を其の男女の上に垂れてゐる黄ろい衣を着た一人の男の裾に接吻してある所などの、見るから少女の好奇心を挑るやうな濃厚な色刷の表紙の、罫のはいつたノートブック一冊と引き換へてくれるのであつた。此の美しいノートブックを貰ふのは隨分うれしく樂しみであつたのだけれども、其の爲に眼を閉ぢて長い祈禱をさせられるのは苦痛だつた。

少女が其のノートブックを抱へながら、よろこばしげに教會の重い扉を開けて、花崗岩の白い石段を下りる時に何とも言へぬ空想的の微笑をするのを見かけたものがあつたに違ひない。

少女は斯うして、未だはいつた許りの小學校では、いろはもすつかり教はらぬ中に、教會では讃美歌を教へられて、よく歌へるやうになつてゐた。それに少女には、どう云ふものか、金縁の眼鏡をかけた耶蘇の若い女の人の方が、色の剝げた洋服を着た學校の受持先生よりは立派て、遙かにエライやう

に思はれた。それからであつた、其の女の人を「先生」と呼び出したのは。
それは丁度或る曇つた日曜の朝であつた。此の日少女は、從姉が病氣で寢て居たものだから、一人で教會へ行つた。
少女の行つた時は、もう大概何日も來る仲間は集つてゐた。女の「先生」はピアノを鳴らしながら皆と一緒に讃美歌を歌つてゐた。軈て其の日は、キリストがあらゆる病人を立ち所に癒したといふ不思議なお話を聞いた後、例の如く美しい繪紙を貰つて歸りかけやうとした時であつた。
ふと少女の肩に後から輕く手を置いて聞き馴れぬ、然しやさしい日本語で
「可愛らしいお子さん。」
と言つた。驚いて少女が振り返つて見ると殆ど同時に、
「よく、お出でなさいました。」
と丁寧な言葉で重ねて云つた。
少女が、其の髭もじやの赤い顏、うす青い目、大きな尖つた鼻をちらと見た時は、何と云ふことは無く電氣にでも打たれたやうに身體中が痺れるのを覺えた。とうとう今日見つかつてしまつた。自分はそれから彼の異人の住んでゐる教會の裏の西洋館へ連れて行かれて、そして魔法にかけられて鳥に化れてしまふんだ——恁ふ考へ出した時、異人が巧みに日本語を話せたといふ思ひかけぬ驚きよりは、何うしたらよいだらうか、何うしたら家へ逃げて行かれるだらうか、其ればかりを考へて居ると悲し

く怖ろしくなつて來て、泣き出しさうな顔になつたのであつた。すると異人は、眞紅なリボンを上衣の衣嚢から取り出して、

「ほんとに可愛いお子さんです、此れを上げませう。」

と云つて少女の手に持たせた。

少女は此のリボンを呉れるのは屹度自分を欺すのだ、而して此方の心に油斷をさせて置いて魔法にかけるに違ひない――こう直覺した。それて默つてリボンを異人に返さうとした時女の「先生」が少女の傍に寄つて來て、

「平島さん。」と彼女の名をやさしく呼んだ上「それをお戴きなさいまし、少しもこはいことはありませんよ。」

と親切に言つてくれた。

異人は立つて微笑んで少女を見下ろして居たがやがて女の先生と何か英語て話し出した。何と言つたのか無論少女には少しも分らう筈はないが、其の話の間に少女の黑い房々として髪の毛を撫でゝくれたりするのを見ると、兎に角害意の無い事は分つたので少女は少し安心したのであつた。

其の日少女はリボンと美しいカードとを持つて家に歸つて來た。

斯うして少女は日曜の朝は屹度日曜學校へ出席した。それが終ると、尖塔の鐘が鳴り出した。是から大人の爲に說教が始まるのであつた。マッコールドといふ例の異人は一番前の椅子へ腰をかけて讃

美歌を巧みな日本語で歌つた。其の聲が誰のよりも高く透明に聞えるのであつた。

少女は次第に「耶蘇の異人さん」と言ひ出して此の宣教師に馴れて來た。そうして少女は又異人からは「可愛ゆいお孃さん」といふ長い代名詞を名の代りに呼ばれた。日曜の午後などには從姉と一緒に異人の家へ遊びに行きもした。

水色の薄い窓掛――其の窓縁に置かれた西洋花の鉢――鸚鵡の華奢な籠――眞白い壁に掲げられたメツサイアの寫眞版、其う云ふ裝飾の施された階下の室で、二人は好く讃美歌をうたつた。二人が歌ふ時にピアノを彈いた女異人は歌が終ると二少女に交る〴〵接吻をして與れた。その上に歸る時は澤山に西洋菓子を紙に包んで貰ふのが常であつた。其れから二少女は此の「耶蘇の異人」さんと一緒に棧橋の方へ夕方など散歩がてら凉みに出かけたものであつた。

一時は敎會の前を駈け拔けたり、魔法使だと思つたりして疑ひ怖れた異人さんとは恁うして馴れ親しんで來た。英語で海だとか學校だとか言ふ短語は學校で其の漢字を敎はらない中にもう幾つも記憶が出來た。

身體が惡くて一二度日曜學校へ出席せずに居た時などには、わざ〳〵「女の先生」が見舞旁迎へに迄來てくれた。

學校で讀本の時間に、自分一人だけが讀めて大勢の生徒の前で受持先生から褒められるのよりも少女は、水色のカアテンが快く風に搖れてゐる洋室で讃美歌を歌ひ終つた時、女異人から堅く抱き締め

られたまゝ、額にキッスされる方がどの位うれしく且つ幸福に感じられたらう。……

やがて其の年もクリスマスとなつた。少女は其の夜の餘興の活人畫に選び出されて聖母マリアの役を務めさせられる事になつた。會堂は盛裝した婦人や立派な洋服を着た人々で滿ち溢れてゐた。遲れて來た會衆は廊下に立つた儘の者も澤山あつた。四方の壁には、あらゆる政治的迫害を受けたユダアの國民的傳説と憧憬を背景として生れたメッサイアが其の神秘なる敎訓のために十字架の死を遂げた美しい傳記を追懷させるやうな繪畫が幾枚となく掛けてあつた。會堂の左側の奥には凧、羽根、羽子板、鞠、獨樂、ノートブックなどがごたごたと吊されてあるクリスマス・ツリーが目も醒めるばかりに見えた。暖爐の火は希望の光りに燃えて、青き瓦斯の仄ゆるぶ色の中に、赤いリボンや白いリボンでお下げを結んで袖の長い華やかな衣服を着た少女の群が彼方へ動いたり、此方へさゞめいて來たりした。紋付の羽織に袴をきりりと穿いた少年の勇ましいさつぱりした姿が其の間を敏捷に縫つて歩いてゐた。

對話、暗誦、讃美歌合唱等と餘興の番組が進んで次第にクリスマスの夜の歡樂が深くなるがまゝに、戸外では雪が音も無く靜かに降り積つて行くのであつた。いつか餘興は其の夜の呼び物たる活人畫となつた。病み上りの少女の顏は豐かな惠みに富んだ聖母マリアを思はせるには寂しい位であつたが、然しなつかしいうるみのある其の瞳は「ムリリヨー」の描いた聖母を思はせるやうな美しい尊さがあつた。拍手は、あらゆるところから起つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

少女は其の夜家から迎へに來た俥に從姉と一緒に乘つて、持ち切れぬ其の贈物は女中に委せて先に歸つたのであつた。

——其れからであつた。少女はさつぱり教會へ行かなくなつた。何故といふに、クリスマスの贈物は嚴格な叔父叔母をして遂に不安の念を起さしめたからであつた。例へ、教會であらうとも一面識も無い人々から殊に外國人なぞから恁ういふ物品を貰ふと云ふ理由は無い、娘達には家庭で十分に必要な物品を與へてあるのに、さう云ふ事をされては却て少女の爲にならぬ——恁う云ふ叔父の嚴格な性質に加へて、基督教を絶對に擯斥する先入の思想は遂に娘及び姪二人を教會へ出入することを禁じたのであつた。

それにも拘はらず、日曜の朝になると例の女の「先生」が屹度迎ひに來るのであつた。其の度に叔母は女中に言ひつけて二人は病氣で寢てゐるとか遊びに行つてゐないとか言つて、すげなく歸してしまふのであつた。其麼事が二三度續いた後、或る朝、女の先生は異人と二人で又迎ひに來た。

「お孃さんはいらつしやいますか。」

恁ふ云つたのは女の「先生」であつた。

少女は緣側で從姉と人形であねさまごつこをして遊んでゐた所だつたが、先達迄荒唐なキリストの話を聞かされ讃美歌を教へられたと同じい彼のぎんぎんする聲を、こうして此處で聞いてゐるのが奇異に感ぜられてならないのだつた。頓て續いてこう云ふのを聞いた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「おや、未だ御病氣でございましたか、それは誠にどうも……あのお癒りになりましたら亦どうぞ御出てなさるやうに御傳へ下さいまし。」

歸る時には異人も巧みな日本語で「お孃さんによろしく。」と云つて出て行つたのだつた。

……其の年は暮れて、少女は九つとなつた。

滿洲へ若つてゐた父は三月に歸國した。父の歸國と共に少女は叔父の手から父の手に返へされた。父は叔父の家からはずつと離れた淋しい所に小さな家を借りて、下女代りの老婆と其處へ移り住んだ。

少女が毎日毎日、胡桃の樹の多い運動場の直ぐ後が暗らい墓地に續いて居る村の學校から歸つて來ると、父は少女の爲に何かしら菓子を買つて置いた。而して少女の喜ぶ顏を見て無性に樂しんだ。其れ程父は老ひに近づき、少女は母の無い淋しい一日を送つてゐたのだつた。少女は何時もたつた一人で學校へ行つた、そうして歸つて來た。何故といふに少女には、自分の名を親しげに呼んで誘ひに來てくれる友達が無かつたから。

久子久子と呼ぶ父の聲は、少女の耳には、だんだん行きはぐれたやうな悲しい感じを增させるばかりであつた。

學校の行きがけに呼びに來てくれたり、祭りの太鼓の音に軒提灯の紅い灯を見に誘ひに來てくれた

りする友達がたゞの一人も無いといふのは、其れ程寂しいことではないのだけれども、こうして一人になつた父の眼に暗らい影の見え出して來たのが悲しく佗びしい。

少女は其う云ふ日を二年ばかり過ごした。父は最早五十であつた。

少女の母が死んだ四つの秋から九つの三月迄、彼れ程仲善く一つ家に同じやうに育てられて來て、お手玉を取つて遊んだり、あねさまごつこをしたり、一緒に教會へ行つたりした從姉とは次第に疎ましくなつて了つた。別れてから少女は從姉にたつた一度逢つたきりであつた。

それも幾程家が離れて居たからつて、せめて學校だけでも同じい高臺の、彼の綺麗な學校で休み時間には、運動場の柵に寄りかゝりながら、直ぐ目の下に、繁華な町の光つた甍や教會の尖塔を一目に見下し、少し遠くは黑い小さな汽船や、白い商船や、帆柱が林のやうに立ち並んでゐる親船の微かに揺れて居る海岸の光景を見渡して、とりとめも無く美しい懷疑と憧憬に富んだ話をすることが出來たなら、却て切ない離れ難い愛着を増したであらうけれども。——

四人の從姉と、明るい電燈の下で賑やかに笑つて夜を過ごし、青い海の望まれる叔父の家で五年を暮らして來た後の、父と雇老婆とたつた三人の斯ふ云ふすら悲しい日常の生活と、四周の寂寥とは、何日か其れに深く親しむで行くまゝに、少女を益々考へ深い打ち濕つた憂鬱な性質にさせてしまつた。

一人で取り止めも無く物を思つたり、暗らい所へ來て窃に涙を流したりするやうな、少女の近頃の

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

佗しい癖は既に此の時分から養成されて來たのであつた。

丁度二年目少女の父は滿洲へ殘して來た事業の整理をする爲に、半年ばかり又行つて來なくてはならなかつた。父も今度は兄の手に少女の世話を賴むことは出來兼て、此處からは十里ばかりある娘の所へ少女を預けて、其の年の十月滿洲に向つて出發したのであつた。

福仙寺といふ淨土宗の寺——少女の姉は其の寺の梵妻であつた。

此處からは青い海を見ることも出來ず、晴れた日にさへ波の遠鳴りも聞えない。けれども波の遠鳴りが聞えたからつて、どれ程少女の柔らかな慰めとならう。氣怠い、誰もかまつてくれぬやうな音を立てゝ、ぽたぽたと欝陶しそうに散り落ちる椿の花を見るのが、非常にさびしく賴り無い、あゝ其れよりも、彼の冷たい邪慳な姉の目か一度も自分に向つて微笑んでくれた事がないのが、少女には、つらく情けないのだ。

蛇のやうに陰険な、推し默つた住職の青白い顏は、見たゞけでも凄いが、少女は此の寺に來たが爲に其の恐ろしい顏を見なければならぬことを、決して悔いるやうな事はしない。たゞ彼れ程、父と二人の時に、なつかしく慕はしいものに思つてゐた其の姉から、思ひがけぬ虐待を受けやうとは、少女は何う考へても情けないのであつた。父はいくら長くても半年もすれば屹度歸つて來ると言つた。さう言つた父の言葉を聞いてから、少女は初めての冬を、此の穴倉のやうに冷たい淋しい寺の中で、蛇の

やうな光つた姉の目や住職の凄い青白い顏を避けるやうにして送り、そして春となつた。
　併し父は何日歸つて來て與れるのだらう！　もう半年は疾くに經つてしまつた。何日まで少女は恁うして此の淋しいがらんとした寺で、恐ろしい光つた目ばかりの中に、震へながら居たら好いんだか分らないのであつた。
　少女は、それに此の寺を不思議に思つた。そして其の不思議な寺に居る人々を、もつと不思議に怖れた。一體この寺に居る人が何日樂しげに笑つた例があつたらう。誰も皆、隙があつたら、飛びかつて嚙み付かうとして居る蛇のやうに、尖つたもの凄い目付をして居る。そして話をしてゐれば互ひに附け狙つてゐる敵に出會つたやうな風だ。
　少女は、何故に彼は恁麼寺の梵妻なぞに我から好んでなつたのだらう。恁ふ疑はずには居られなかつた。……
　或る雨の日、縁に立つて少女が、たゞ廣い庭の暗らい植込みをじつと、しかし別に何を思ふでも無く瞠てゐると、彼女の名を呼ぶ聲が奥の方でしたやうであつた。けれども少女が、自分の耳の誤りて、さう聞きとれたのであらうと躊躇して居ると、
「久……お久。」
　はつきりと恁う言ふ姉の鋭い聲が、今度は續けざまに聞えたので、少女は思はず身を縮めたが、急いで奥の方へ駈けて行つた。

姉は何日もの通り、窓を後にして火鉢の前に座つて居るのだつた。少女が襖を開けて、は入つて來るのを見ると、

「お前はあれ程わたしが呼ぶのに聞えなかつたのかい、え、え。」

と、もうヒステリカルに瞼を痙攣させて、濁つた冷たい眼を少女にけわしく向けた。少女はたゞいゝえ」と微かに云つたまゝ俯向いた。俯向いてしまつたけれども、少女は、自分に向つて青白い尖つた顔の姉の目が蛇のやうに光つて血走つてゐるのを直覺した。

軈て姉は早口でせつかちに云ひ出した。

「久。お前の親爺さんにも困つたね。半年ばかりで歸るからつて私の所に、お前を無理に推し付けて行つてさ、昨日何で手紙が來たんだらうと思つて讀んで見ると、今年中位は歸れさうもないから、それ迄宜しく世話を頼むつて、隨分勝手な言ひ草ぢやあないか……ね、お久。」

少女は聞いて居たが、自然に涙が頬を流れた。今に歸つて來るだらうと思つてゐた父が今年中は歸つて來ることが出來ないと云ふのは、仕方も無い事だけれど、自分の姉から恁麽悲しい事を聞くのが情けないのだつた。

少女は、併し何か姉に言はなければならないとは思つたが、斯ふ云ふ時には何と言つて返事をしたら好いものか……それに聲が咽んで何にも言へなかつた。而して只無性に込み上げて來る悲しさに自ら感激して、涙はとめ度も無く頬を傳つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

姉はそれきり最う何も言ひ出しさうな風が無かつたが、ふいに又、

「私あ最うお前の面倒は此れ以上見られない……隨分わたしはお前の母親から虐い目にあはされたんだからね。あゝ忘れやしない。」

と言つたが終ひの方は、恰も彼女の前に誰か目に見えない敵があつて丁度それに向つて言つて居るやうだつた。此の短かい姉の言葉は、今迄少女の胸の奥に黒い塊りのやうになつて澱んでゐた疑ひが偶然に解かれるやうな動機を少女に與へた。死んだ少女の母は姉にとつて繼母であつたといふこと、或る夜酒の爲に父がふと少女に言つた「あれ（少女の姉）は親不孝者だ……」といふ言葉――さう云ふ此れ迄に少しも少女の注意と疑ひを拂はなかつた事が、霧のやうに湧き起つて來た。少女は何故に姉が梵妻になぞ自ら好んでなつたかといふ事を今幽かながら推測し得ることが出來るのであつた。

少女は顔を上げて、姉の冷たい光つた目や、うすく黑ずんだ唇などを見るのが、非常に恐ろしく又つらいので俯向いたまゝで居た。そしてもつと姉は何か言ふのであらう、と思つて少女は頰の涙を初めて手巾で拭つた。

然し最早姉は其れ切り何も言ひ出さなかつたので、少女は靜かに立ち上つて縁側に行つた。

此處で少女は、何うしやうか、それを考へる爲に其の柱に凭りかゝつて、しらしら降り出した三月の雨が濕つた地に涙のやうに冷たく流れて行くのをぢつと見入つた。ぢつと見入つて居ると、何故とも無く悲しくなつて來て、自然と聲を出して見たくなつた。少女は未だ從姉と教會へ行つてゐた時

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

分、女の「先生」から敎へられた讃美歌の中で最も節の悲しい柔らかな、そして少女の愛誦した歌の一節を無意識に歌ひ出した。其の歌は斯ふのであつた。

……………………………

こよひわがみ　もろくも
いきたえなば　あしたは
わがたましひ　いづこにあらん
たよりもなき　ゆくすゑ

胡桃の樹の多い村の學校の、暗らい敎室で、どす黑いふやけたやうなオルガンの音に連れて、無意味に大きな聲を出させて歌はせた「雁、かり渡れ大きな雁先きに……」といふやうな亂暴な調子の唱歌よりも、桐の靑い大きな葉が玻璃窓の直ぐ外にやはらかく搖れて居る敎會の、彼の朝の室で、英語を上手に話す女の「先生」から親切に敎へられた此の歌の方が、どの位少女にはなつかしく忘れ難い記憶となつたらう！　今でもありありと目に浮んで來るのは、あの輕い爽やかな音の出るピアノを巧みに彈く紫の袴を穿いた先生の、金緣の目鏡をかけた白い横顏と、髮の匂ひ。丁度それは、ふわふわと目の前に浮いてゐる風船玉のやうに、手を伸したらふうわりと捉へられそうで、中々に捉へられない――そう云つた風な、もどかしい、いらだゝしい淡い哀しみの記憶となつてしまつた。……

寺の鐘が鳴り出した。
鳥が屋根の上で騒いでゐる。或時は烈しい翼の音も怪しく啼き聲に交つて聞えた。
少女は、やがて暮れかゝる庭に、又、しらしらと魂の摺れ合ふやうな音を立てゝ降り出した雨を聞いて居ると、自分の身の廻りがたんだん淋しいものに包まれて行くやうに感じられた。
「お前の面倒は見られない……」
先刻言つた姉の言葉を、もう一度繰り返して、自分は何うしたら好いだらうか。少女は、もう自分は全く一人ぼつちになつてしまつたのだ。自分の頼るやうな人は一人も居ない。――恁ふ考へた。
然し斯ふ云ふ時に思ひ出すのは、教會の異人の事であつた。
赤い髭もじやな顔、大きな尖つた鼻、うす青い眼、太い毛の生へた指――さう云ふ顔、さう云ふ眼さういふ指の人から、やさしく少女は髪を撫でられたり、抱き上げられたりしたのであつた。たしか會堂の前の紫陽花が咲いてゐる頃であつたが、少女が或朝、遲れて出て來る從姉を其の會堂の扉の前で待つて居た間、何の意味も無く少女に云つた異人の言葉をふと今思ひ出した。
「私が米國へ歸る時には、屹度一緒に連れていつて、日本に無い色々珍しい物を見せて上げます。」
未だはつきり覺えて居るのである。少女は胸に高い街の建物、夜の賑やかな雜沓、公園の燈影と噴水――其う云ふ美しい幻影を描いて見た。少女は、自分は今たつた一人ぼつちになつてしまつたのたから、一層の事、異人の所へ行つて一緒に外國へ連れていつて貰はふかと思ひ迷つた。しかしあれか

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ら最早三年も經つて了つた。あの白い教會の後の西洋館に異人は未だ居るだらうか。それとも疾うに米國へ歸つてしまつたかも知れない。

少女は色々と——例へば置き忘れた物を取りに行く時に、或る微かな不安を感じながらも、何處か思ひ切つて棄てゝ了ふことの出來ない執着に牽かれて、行つて見なければ氣の濟まないやうな必持ちて、心の奧に置き忘れた多くの記憶を探し出そうとした。けれども中には、かすかな哀しみの感情だけとなつてしまつた記憶もあつた。

少女の白い顏と白い手と白い足とが、ぼんやりとし出した時分には、夕闇は霧の樣に深くなつて行つた。そうして其の夕闇の中に、やがて少女の白い足が消え、白い手が見えなくなり、顏だけが仄白く消えかゝつたり浮び出たりしてゐる時分には、屋根の上の烏はすつかりもう居なくなつて居た。（六月二十八日夜作）

——人見直——

寶玉

おそろしき物のひびきにいくたびかたじろきふせしをとめなりける
何事もこばみえいはぬはかなさにかくて再びみを投ぐる淵
誰となくよとなくわしる身はなほもつきぬ大路のあれかしといふ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

來しかたはほのと見ゆれど行先は知る要もなし
この日やすかれ

ただ一歩なにこごろなく踏みいりし彼のゆう
べよりわざはひになく

ふきいるる夜毎の息のなほ弱しかくせめたま
へそのうへにして

何故とこころただせどかかるまにはやみづ深し
流れゆくらむ

たびかさね濃きむらさきの室にぬる應報と知
れにごる血のいろ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

あまりにも毒のにじみしひとやゆゑおそろし
とにぐ悔ひなくばよし

いつの日かあだしわが血のつくるらむ傷のあ
となどみればはかなし

二の戀に破れしゆゑかゆゑ知らず前の戀など
しみじみと思ふ

おほらかに戀を語れど空蟬の殼にもましてう
つろなる身は

つひにいま碎けをちゆく寶玉をかなしと知る
やられしとしるや

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

―― 夏 ――

なよやかに牡丹の花ちるわがうれひ五月のく
れの小雨にぬるる
しろがねの月の光りの丘に這ふほとりしづか
にすあしにてゆく
このさきはただおそろしき闇にいるいはやと
しれどいたし方もなし
はるばるとちさき器に血をたたへきえけるは
ては一息に投ぐ

日盛

日の盛り独切りし路を御寮馬の
日盛りの十字街を痩せ猫の茶色なるが
日盛りを土人行く鰐河の土手椰子の森
ブッと切れし綴り糸氣病む肺の子夏の夕

眠う読む日盛りを、新内の流し行く

御籤占も日盛りを友が神詣

いたづらに試筆せぬよ院に暑う住む

曹達湯に猫の蚤取る暑さありと

病むを見舞へば遊漁と湖に芦の晴れ

51

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

—S—　　—O—

豪遊？と拗戻て甜瓜愛す君

飼へば忘る病兒金魚に馴染むひる

謠聲は君か妻を初雷の雨

心淨と夏を白塔の寺に籠る

迷ひ猫が悲しう鳴くよ庵は夏の月

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

馬入遊船を鮎に流す三ヶ月の凪

北斗數へて船遊を獨り惜がり

買ひし家の主立たぬ避暑地督促の使

虚を傳ふ萬犬に驚けば日向草の

葉鳴る芦の乘り捨て舟に釣垂るる

—白 雨—

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

群衆中の人

「讀まれる事を欲しない」と云ふ事が或る獨逸の本に就いて、云はれてあつた。

世の中には、知られる事を欲しない秘密が澤山ある。だが、秘密は露れやすいものだ。それを恐れて人々は、幽靈の様な告白者の手を握りながら、或は、哀れげに告白者を見守りながら夜毎に寢床の中て死ぬ——絶望と苦悶のために死ぬ。悲しいかな、人の良心は往々にして只墓所へだけ投げこむ事が出來る様な重荷を取上る事がある。だからあらゆる罪惡のエッセンスは不明である。

近い頃であつた。ある秋の日暮時私は、ロンドンのD—カフエーの大きな弓形の窓の側に坐つて居た。二三月間病氣であつた私は、今は元氣も力も、回復し、單に呼吸するのも樂みて、自分の苦痛の源てあつた物からも非常な樂しさを得た。又何事にも靜かな、しかも考究を好む、興味を感じた。煙草を口にし、新聞を、膝の上に置いて、私は其の日の午後の、大部分を樂しく過し、今は、廣告を見つめたり此の室の中の（カフエーの）混雜してゐる人々を注視したり、或は、すゝけた、硝子越に、町を覗いたりして樂しんて居る。

此の街は、市中でも、重な、往來の一つて、したがつて、終日雜沓を極めて居るが、暗くなるにつれて、群衆は、刻一刻と增加して來た。遂に、ランプの光る頃までには、二つの鈍い、しかも間斷のない人の潮が、往來を、突進して居た。私は今まで夕方の特別な時刻に、遭遇した事は、なかつたので、此の人の頭のみだれさわぐ海は、私に一種の愉快さを與へた。遂に私はホテルの內部の物に拂つた、凡ての、注意を、やめて、外部の光景に心を、奪はれてしまつた。最初の私の觀察は抽象的な總括的な、方面であつた。私は、通行人を、いくらかの集團として見、そして、集合團體として、彼等に付いて、考へた。然し間もなく細かに目をつけて、彼等の姿や、衣服、態度、歩き振、容貌、又は表情等の數限りもないのを細かな興味をもつて視た。

今行き過ぎた者の大部分は、實業家らしい態度を、充分に備へて、しかも皆な、群衆を通り越す道を考へてゐる樣に見えた。彼等は、顰顏をして、目は敏活に働いてゐた。外の通行人に、突き當つた時は、癇癪も起さず只著物を搔き合せて、いそいで行つた、又其外の絕えず休みなくうごいて居た大勢の人達はほてつた顏をして、四圍の人々のあまりに混雜なために却つて、寂寞を、感じる樣に彼等同志で話したり身振りしたりしてゐた。彼等は自分たちの進行が妨げられた時は、急に、つぶやく事を止めるが身振りは前よりも多く、脣にぼんやりとした、しかも多過ぎる笑を湛へて、妨けた人が進行するのを待つた。若し押された時は、彼等は、押した人に丁寧に腰を屈めたりして、混雜に壓されて、反對する事が出來ない樣に見えた。この二組の人に付いては、私が記述したより外には區

別はなかつた。彼等の衣服は禮儀に適つて居ると斷言する事が出來る程度のものだつた。彼等は、從に貴族、商人、法律家、貿易商、株式賣買人、其他閑人や自身の事業に、活動的に、從事して居る人即ち自分の責任で事業を行ふ人達であつた。が彼等は、私の注意をひどく刺戟しなかつた。

書記達は、明に判る。そして私はこゝに二つ注意すべき區分を認めた。魔窟で働く年少書記――よい着物を著、ぴかぴかする靴を穿き、髮も、油てひからせて、高慢に話す若い紳士である。適當な言葉が、ないがDeskismと呼んでもよささうなはしつこい擧動をとり去ると此の人達の動作は一年か一年半ばかり前に眞の紳士社會で一番よい動作で、あるとしてあつたものを摸倣して居る様であつた。彼等は紳士社會では廢つた動作をしてゐた。しかもこれがこの階級では最上のものと思はれて居た。

しつかりした商館の、上級の書記、即ち、Steady old fellow"は、すぐに見別る事が出來た。其の人達は身體に氣持よく合ふ様に仕立てた、黑や鳶色の上衣やズボンを、つけて、白い衿飾やチョッキや大きなしつかりとした靴或は、厚い股引や脚絆を、穿いて居るのですぐ知れた。其人達は、皆、多く頭が禿てゐて、そして、長い間ペンを、はさんだ右の耳の端は頭からはなれて可笑な風に立つて居た。又彼等が常に、帽子をかぶるにも脱ぐにも、兩手で、する事と、古風な形の、短かい、しかも本物の金の鎖のついた時計を、つけて居る事とを見た、若し眞にそこに尊敬すべき性情があるとすれば態面を重ずるところの傾向であつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

又容貌のめだつ人も多かつた。が、私はすぐそれはあらゆる大市街が常に苦められてゐる高慢な掏摸の一種類であることを知つた。

私は非常の考究心をもつて、彼等を見守つた。そして眞の紳士が彼等を、見るならば、すぐに紳士でないと云ふ事がわかると思つた。それは彼等の、袖口の廣い事と、誰にでも、馴れ〳〵しい樣子が、彼等の本質をあらはすからだ。

少しも記さなかつたが賭博者は、尙容易に、識別する事が出來た。彼等は、色々の、着物を、付けて居た。天鵞絨のチョッキや華美な襟巻や鍍金の鎖や金銀細工のボタン付の、向ふ見ずな手妻をする惡漢の着物から、つゝましい、じみな寸分の隙もない僧侶の着物までも。又、彼等の顏色は水氣を帶びて黑色で、どんよりした眼付や、脣が蒼白で、しかも、ぎッとして居るのでわかつた。其外にも二つの特性があつた。それですぐ彼等を私は見付る事が出來た、二つとは會話する時の調子が用心深く低い事と、彼等の手の親指が普通の人のよりはそりかへつて居ることとである。

しばしば私は、此種類の狡猾な人と一緒になつた時、いくらか其の種類の人と習慣の異なつてる人を見たが、矢張同じ羽子の鳥てあつた。彼等は才智て世渡する紳士と、思はれるかも知れない。彼等は二つの大隊になつて、社會を掠めてゐる樣に見える、しやれ者と、兵士の二隊とてある。前者の主な人達は、髮を長くして、又笑をたゝへて、居るが、後者は、軍服を着てしかめ顏をして居る。

躾のよいと云はれる階級を記述する事に於て、自分の考へ方の上に、一層暗い、一層深い、題目を見出した。私は猶太人の行商を見た。其人の容貌は全體に卑しげな謙遜の表情をもつてゐて、目は鷹の様に、輝やいて居た。又物乞ひを職業的にする乞食が、絶望から、仕方なしに夜だけ物貰ひをする様になつた評判のよい乞食に悪口をつくのを見た。

今にも死にそうな弱い幽靈のやうな病人が群集の中を、ヨロヨロしながら、何がな慰を得るか、又は、一度失つた望を探して居る様に、人の顏を、視て、斜歩して行くのや、謙遜な若い娘が長い間おそくまで働いて後、慰めのない家に歸つて來るのや、悪漢の一瞥に、恐れるどころか、殆どちぢみ上つてゐるのをも見た。凡ての種類の女――あらゆる年齢の女をも見受けた。若い時には、並ぶものが、ない位な美人であつて、バリアンの大理石の様な面をもつてルシアンの様子を思ひ起させるが、心は、不潔で充たされてゐるいやらしい癩病やみの様な心の人、又皺のよつた顏を若く見せるために寶玉て身を飾り、白粉や紅を塗つた老婆や、まだ夫人には、ならないほんの、子供が、長い間此の地に住んでたので其の商賣の恐ろしい、妖媚にはなれて居て、此の悪道に於ての年長者と同等となる様に氣も狂ふばかりの野心に燃えてゐるものやら、記述の出來ない様な多くの大酒飲も見た――傷だらけの顏をして、目はどんよりとし、着物は細かい片布だの、つぎはぎしたのをつけて、よろめきながら聲も出さぬのや、又一度は、大變によい着物であつて、今もよく刷毛のかゝたのを着た人や、しつかりと、すばしこく歩く人も其の顏は、ひどく、荒々しくて、赤く、そして、群衆を通して、大股に

歩く時、彼等は手のとゞくところに來るものを何でも其のふるえる指で掴つた。此の外に、パイ商人、門番、石炭運び、掃除人、オルガンを彈きながら行く人、猿まわし、小唄賣等が、賣つたり、唄つたり、不調和に、カチカチとして耳を振動させる凡ての騷々しい過度の活動や、目に病みを與へる樣な事や、ボロの着物を着た色々の種類の疲れかゝつた勞働者を見た。

夜が深くなるにしたがつて、其の光景に對する私の興味も深くなつて來た。夜になつた事が群衆の人物をすつかり變へた（規則正しい人々はだんだん家に歸つてしまい、夜が其の洞穴から凡ての罪惡を持つて來た時には荒い連中は家から出かけて來るので）のみでなく、瓦斯燈の光りも變つた。はじめは暮れて行く日と、光を爭つて居たが、今や遂に勢を得て適當なしかも華やかな光を凡ての物に投げてゐた。凡てが暗く、しかも光があつて、黑檀に例へられるターチュリアンの文體の樣であつた。

瓦斯の光が明るいので、一人一人の顏がよく見えたが、光の中の群衆は迅速に飛ぶので、どの顏も二度と見る事が出來なかつた。然し其の時の心持が一種特別であつたので、一目見ただけで長い歷史を、見る事が出來た事は幾度かあつた。

私は、額を硝子に付けて、群衆をよくながめた、其時急に、あらわれた六十五か七十位の老衰した人が、私の凡ての注意を集め、又心を奪つた。其の人の表情に絕體的の特質があつたからだ。私は曾て、この樣な表情に似たものさえ見た事がなかつた。今もよく記憶して居るが、其の時の私の最初の

考へはもしも、Retzchが此れを見たならば彼の繪の悪魔の化身よりもこれを好んだてあらうと云ふのであつた。私の最初、物を見た其の當座それのもつてゐる意味を、分析しやうとつとめる結果、廣い知的勢力、注意、吝嗇、貪慾、冷淡、悪意、殺人、勝利、喜、非常な怖、烈しい絶望の意思等が、頭の中に入り亂れて起つた。

『どんな、兇猛な歷史が胸の中に書いてあることつたらう……』と私は獨言ちた。

それから彼を長く見て居たが彼に就いてもつと、知りたいと、云ふ切な熱望が起つて、私は急いで外套をひつかけ、帽子と杖とをもつて、往來へ出て彼の通つた方向に群衆を押わけて進んだが、其時は彼はもう見えなかつたのであつた。

少しの困難の後に遂に彼の見える所まで來たので、彼と接近して進みながら、彼の注意を引かない様に氣を付けて、私は、彼に從つた。

彼の人格を試驗する好機會があつた、彼は身の丈が低く、非常にやせて、又大變弱々しかつた。衣服は大抵垢じみて、又ボロボロであつた。彼が時々ランプの強い閃光の中に來た時、美しい織物であつたリンネルも又、垢じみて居る事がわかつた、そして、よくは見えなかつたが、着て居たヅボンは細についてあつた。又たしかに古物である外套の穴から私は、ダイヤモンドと短刀の光るのを見た。これらの觀察が、好奇心を高めて、どこまでも此人について行かうと、私は決心した。

日はもうすつかりと暮れてしまつて、濃い、濕つた霧が全市を覆ふたがまもなく强雨に澄されてし

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

まつた。この様に天氣が變つたので彼等は、急に、あたらしい騷動を始めた、そして傘の世界で、一面、暗くなつてしまつた。ためらふ人、押す人、ぶつぶつ云ふ人は十倍にも增加した。私は雨を氣にしなかつたが病氣上りであつたから樂しみの中にも、いくらか心配であつた。で口の廻りにハンケチを、あてたまゝ行動を、つゞけた。半時間位此の老人は、困難しながら往來をたどつた。私は、彼を失はない樣に、彼の肱に接するばかりに歩いて行つた。彼は一度も、後を見返らなかつた、勿論私をも見なかつた、やがて、彼は横道へまがつた……こゝも、人で一ぱいであつた。彼の擧動は變つて來た――前よりもゆつくりと前よりももつと目的がないらしく、ためらいながら歩いた。彼は、遂に、志もなく同じ道を、幾度も、行つたり、來たりした。群衆は尙ほ混雜してゐるので私は彼れに近づいて居なければならなかつた。町は細長いもので、彼の行路は一時間程その中にあつた中に通行の人はだんだんと減つて平常、公園の側の大道に正午頃、居る位ひの人數になつてしまつた。――ロンドンの人と、アメリカの一番人通りのある町の人との間には非常な差がある。

次ぎに曲つた時、四つ角に來た、そこは、非常に明るく、人が溢れ出しそうてあつた。彼は、始めの擧動をくりかへした。顋は胸の上に落ちて、目は全體に皺かより眉の下から、彼の周圍の人の上に兇猛に光つた。彼は落着いて、しつかりと道をいそいだ。然し、四つ角をめぐつて又、再び同じ道をたどつたのには私は驚いた。そして又同じ道を再三再四繰返してはあるいたが一度は急に廻つて來て殆私を見付けそうになつたのには前よりも驚いた。此の樣な運動で彼は、其上一時間を費した。そ

してその時間の終には初めよりも通行人に邪魔される事が少なかつた。雨は迅速に降つて、空氣は冷え、人々は彼等の家をさして行つた――短氣な身振で、人々は、わき道にそれ、割合にひつそりとした。一哩の四分の一程あるこゝまで彼は活潑に突進した。これほどの年寄りがこんなに歩くとは、夢にさへ見た事のない私は、追求するのに骨が折れた。二三分の後私共は大きな忙しい勸工場に來た。彼はこゝをよく知つてゐる樣だつた。買手や賣手の中をあてもなくあちこちと歩いて行く時、彼の始の擧動は再び明らかにあらはれた。此處に過した一時間あまりの間、見付られないで、しかも彼を見のがすまいとするには、可成な注意を要した。幸ひにも護謨靴を穿いて居たので靜かに歩く事が出來たので、彼は片時も自分が見られてゐると云ふ事を知らなかつた。價もきかず一ことも語らず彼は店から店へと入つて、凡ての物を狂的にぼかんとして見惚れてゐた。私は今、彼の行助に氣絶する位驚いて、どこまでもどこまでと自分の滿足するまで彼を離れまいとかたく決心した。

大きな音で時計が十一時を報じた。勸工場に居つた人は、急いで出て行つた。一人の番頭が戸を閉じる時かの老人を小突いた。其時私は、彼の身體が烈しく震動したのを見た。彼はあたりを心配そうに見て往來へ急いだ。それからは殆ど信じかたい程の速度で人通の少ないくねくねの小道を通つて、私共が最初出發したあの大きな往來に再び出た。――即D――ホテルの通りである。往來は先刻の樣ではなかつたが依然として瓦斯が明るく輝き雨は非常に降りしきつて殆ど人影も見えなかつた。

老人は蒼白になつて來た。彼はため息をつきながら先刻まで人通りのあつた道を氣むづかしく歩い

た。曲りくねつた變化の多い道を過ぎ、河の方へ轉じ遂に大きな劇場の前に來た。芝居は終り頃で聽衆は戸口に群がつてゐた。私は老人が人中を、押し別けて、行く間に息を切らしてゐるのを見た、しかし彼の容貌にあつた烈しい苦痛は何分か少なくなつたやうに思へた。

彼の頭は再び胸の上にたれて、初めて見た時の彼の樣だつた。大方の聽衆が行つた方へと彼が道をとつたのを見た私は所詮彼の行動を了解する事が出來なかつた。が彼が突き進んだ時、人々は更に散つて老年の不安と、よろめきとが再び彼の上に現れた。しばらくの間彼は十二三人の破落戸仲間に寄添つて歩いたが、一人へり二人へりして人通のない暗い、陰氣な小道へ來た時には只つた三人になつた。老人は一寸、とゞまつて、そして考へに沈んだ樣に見えた。が、やがて非常に激昂して私共が今まで通つた往來とまるで違ふ市外に通じる道を急いで行つた。其所は、ロンドン市での一番健康に害のある場所であらゆる物がいたましいまでの貧と極惡な罪とを以て印刻されて居た。思ひの外な暗いランプの光て、高い昔風の蟲ばんた木造の家々の倒れそうに、ヨロヨロしてゐるのが見えた、それが色々の方向に幻想的に倒れかゝつて居るので家の間に道らしいものを見出し得なかつた。敷石は雜草の繁殖のためにその床から押しのけられて、亂雜に横はり恐ろしい汚物は塞がつた溝の中で腐敗し、四圍の大氣は全く荒廢の色をもつて滿されてゐた。なほも進んで行くと、人間の生活の響が次第に蘇生(よみがへ)つて遂にロンドン市民の中の一番の無賴漢を以て目せられる人達の大きな群があちこちにさ迷つてゐるのを見た。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

老人の魂は風前のランプのやうに再びゆらめいて、今一度彈力ある足どりで大股に前進した。曲り角へ來ると急に赫と光が私共の眼を射た。と同時に私共は開けつ放しの市外れの一つの大寺院——惡魔デンの宮殿の前に立つた。

時はもう明方であつたが、いやにピカ〳〵する寺院の入口を憐れな酩酊者の群はなほも出たりはいつたりして居た。

狂喜のあまり半ば叫びながら老人は內部へと突進したが、すぐ最初の態度をとつて群衆の中を、あてもなく忍び足に行きつ、もどりつした。

人々が戶口に突進するに先きだつて夜間閉鎖の合圖があつた。私が執拗く見守つて居た不思議な人の顏には其時絕望よりももつと烈しいあるものが浮んだ。彼は自分の行動に躊躇しなかつた。併し狂的な精力をもつて大きなロンドン市の中央を指して、再び彼の步行を辿つた。

彼は長い間、しかも飛ぶが如くに逃走した。と同時に一方では今や總てを打込むほどの興味を有つてゐる私は何でも彼を見屆けやうと驚異の眼を凝しながら跟いて行つた。

私共が步いてゐる間に太陽は昇つた。そして再び一番人通りの多いD——ホテルの街に來た時には前夜にもました慌忙と活動とを現してゐた。此處で私は刻々に增して行く雜沓の中で長い間、かの老人を追求することを固く守つた。

然し彼は平常のやうにあちこちと步き廻り、晝の間はこの市街の騷亂の中から出なかつた。そして

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

次の夜の影が來た時私は死ぬばかりに疲れ果てたので、かの流浪者の前に進みよつて、其の顏を見詰めた。彼は私を注意しなかつた。併し私は嚴かに歩みながら彼に從ふことを止めて默想に沈んだ。

遂に私はかう言つた。

「此老人は深い惡罪のタイプなのだ、魔神なのだ。彼は獨居を嫌ふ。彼は「群衆の中の人」なのだ。もう後を追ふのは無益である。これ以上彼に就いて知ることは出來まいから。世界中で極惡な心はHortulus Ammœ (Grnninger によつてかゝれた惡いことばかり書いてある書物で、むづかしくて人間に讀めないもの) よりもつと大きな書物である。そして「讀まれることを欲しない」といふことは恐らく只一つの神の惠であらう。」と。

――ポオ――

夏の日と晝顔

夏の日中の午後三時
小猫は死むだ、
　木影のやうな小猫が
　痛ましくもやつれた小猫が。

キラリと光つた夏の日中に、
可弱い晝顔が
シャナリ、シャナリと動く、
　小猫は、木影のやうな小猫は

晝顏にかき抱かれて、
ニャーゴと云つて死むだ。

夏の日中の晝顏は
シャンナリ、シャナリと
動いてゐる。

病室の夜

鋭く尖つた眞白い室に
まじまじと動く
七色の電氣、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青い窓掛け通す夜光は
痛ましくも亂る。

大きく陰をうつす
ダリヤの黄と紫、
魔物が、赤い帽子きて踊るよな
鈴の音が
カラン、カランと
尖つた室に響いてくる。

息の動(うご)き

女の膚(はだ)に打つぶして息するよな、
朝から、ずつと晝にかけた
　私の氣分は、
眞赤な血液(ちしを)が大理石をぶち砕いて
その菱目(ひしめ)、菱目(ひしめ)に
こう、チイットくい込むで行くよな、
　それから、
九つの黄實(レモン)を銀皿に列べて
七番目のレモンを簪て突きさした
その痛さのやうに。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

淺草から歸へつて（らいてうに）

あの圓まつこい
赤い、大きな觀音さまの提灯から
鳩のお葬式が出たんだよ
今夜だよ、今だつたんだよ、それが、
そう、 六時だ
觀音さまが眞白い着物きて
チヨコチヨコ走りて
鐘樓に上つたつけ、
そうだよ、六時だよ

六時。

送り手合いが面白いや、
どれもこれも、眞赤い衣きて
二錢銅貨を澤山つながせて珠子にして
左手にぶらさげてゐる
若い女、
おい、若い女ばつかりだよ、
　俺を捨てて逃げた女の幻が
　おいらの肩につながつて、
　　あれだよ、
　　銘酒屋女つてのは、
おつと合點、眞實だね。

幻の奴、
あいつ可愛い奴よ
おいらが逃げられた女のことて
涙を溜たつてこと、知るめいと思つたら
つんてのことと見破つて、
　いいよ、いいよ
　私がついてゐる以上
　心配することはないよ、
と親切實意のある言葉。

「おいらは
あめいの有るばつかりに…………」
「て手を合せておがむだら
やつめ、紅提灯の陰から

　馬鹿め、アハハと
笑つてゐたが…………
　ああ、おいらは死にたい
　あの鳩のように、
と聞かせてやつたら
青い顔して走つて來たが、
おいらを抱いて、
ワット泣いた、
おいらは　僞はつかねいや。

銘酒屋通りの夜

赤い煉瓦を
かち合せたよな音たてる
南京そばやの賣笛の聲
　ピララア　ピイ
　ピララア　ヒイ
からからつて笑ふ夜の女
…………………
…………………

「旦那お豆を買つて下さいなあ」
印ばんてん、豆賣り男、
「いりたて豆のほやほや！」
シャッシャ、シャシャック、
ぱちりとはじく小豆の音。

七月十九日――紅吉

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

圓窓より

（前號の續きを掲載する筈だつたが、其後或事に出逢つた自分は、今の心を動くがまゝにここ暫くでも動かして置きたいので、讀者にはすまないけれど特に今回は次のやうな我儘を許して頂く。）

茅ヶ崎へ、茅ヶ崎へ（雜錄）

「意外！」
私はかう言ふより外ない。
只もう意外だ。ふたりの間にかうしたことが起らうとは。
總ては僅三日間で落着した。十二、十三、十四の三日間で。
この五日に木曾へ向ふ筈だつた紅吉は今日茅ヶ崎南湖院からこんな葉書を二枚よこした。
『今朝「ツベルクリン」の注射をやりました。私は大變今朝から牛乳をおいしく呑んでゐます。明日から一合增してもらふ積りです。
　私の室は愛光室の九號、Cとかゝれてしまいました。けれど愛光室の患者のみんなはCだつたので安心しました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「森林生活」をききたく思ひます。
今度入らして讀んでいたゞきたい。』
『今海岸から歸つて來て、ベッドの上にあなたの葉書を見て、私はどんなに悦むだでせう。牛乳を明朝から三合宛にしました。今日は玉子をなまで、七つ飲みました。夕食はマグロの刺身あなたの好きな、あなたと一緒にたべられる日の近くなつた事が嬉しくてたまりません。
これから水をあびて眠ります。今日の注射はきいたらしい。
今夜の細い月を見て私はどうかして月のある間に逢ひたいと考へました。』
日附はどちらも十六日で、一つは晝で、一つは夜。
「意外！」私はも一つから繰返して置く。

＊　　＊　　＊　　＊　　＊

花長を出て、濱町から明るい夜の人形町をぶらついて中野さんを引張つて三の輪行で「途中下車」同人間の通用語もせず下根岸の紅吉の家を訪づれたのは十日の夜の九時過ぎだつた。
私は紅吉を驚かしてやりたかつた。淋しがりやの紅吉が不意の訪問を喜ぶ顏が見たかつた。其邪氣のない笑ひが見たかつた。
今一つにはその前夜の別れ際が氣にかゝつたのとて。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私共三人が、見ることの一寸出來ないものを覗いて見たさのふとした好奇心から吉原に一夜を明したといふことがクリスチャンの白雨を少なからず憤慨させた。

「君達三人は吉原に行つたさうだ。隨分思ひ切つた慘酷な眞似をしましたね。私は君達が行つた深い理由は知らないが、何だか自分か侮辱されたやうで悲しかつた。さうしてたまらなく不快だつた。云々」

又「青鞜」を眞に敬意を以て迎へられるやうな雜誌にしたいと常に言つてゐる同氏は同じ手紙でこんなことも書いてよこした。

「此頃の青鞜には著しく不眞面目な、衒氣的な色が見えて來た。創刊當時に於ける如き眞面目さがない。誠實が乏しい。氣味がない。從て敬意は拂はれぬ。たゞ女としての舊來の因習を破つて今迄女のしなかつたことを大膽にするといふお轉婆娘に過ぎぬ。品位も威嚴もない兒に育てたことを悲しんでおく。」

これが又ひどく紅吉の心を害した。當人得意だつた丈それ丈反省を缺いてゐる紅吉は攻撃の總てが自分一人に拘はるやうに思つたそして、口惜しがつた。皮肉の一つ二つは言つても見たが、萬事直線的な紅吉はもうおちつとしてはゐられない。

「今夜すぐ歸つて、白雨に手紙を書きます。」

いくら止めてももう聞き入れない。

門を出やうとする時私は背後からから言つた。

「今夜書くことはおよしなさい。あしたね、屹度、あした朝御書きなさい。」手紙を書く迄にあの興奮を減ずる爲め多少の反省の時間を有たせたかつたので。

「昨夕別れる時のあなたの言葉を思つて、手紙を書くことはやめました。白雨にしろ、私にしろ、青鞜の爲めを思つてしたといふことには變りはありません。ねぇ皆んな青鞜を思ふからなんです。」何かしら嬉しくて笑はずにはゐられないと云つたやうな顔付て、こんなことを言ふ紅吉を見て私はもうこのことに關しては何も云はなかつた。

その夜紅吉は多く語つた。今日の夕方の氣分だといつて、戀のイラ〱した心を歌つたやうな詩も見せた。女の膚にうつぶして、……とか言ふ詩。

それから今朝上京された御兩親のこと、「萬朝」の記事のこと、今日「國民」の記者に訪問されたことなども。

新聞の記事の成立や、新聞記者の人となりに就て、今迄左程の經驗もさせられなかつた紅吉の心にはこんなことも重大な事のやうに響くに相違ない。不安と物好きな面白さに眼が輝いてゐた。

上野廣小路迄送つて來た。別れる時、

「あした朝、行つてもいゝでせう。其時見せます。」と云つて紅吉は左腕の繃帶の上を押へた。

私は只肯いて電車を乗換へた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

翌朝茅ヶ崎のO氏が白雨の用事を帶びて來た。
丁度いいと思つてゐるのに來る筈の紅吉がなか〳〵來ない。電話をかけると行違いに來た。
O氏が歸ると私は紅吉の左腕を摑んで、强て繃帶を取り去らうとした。
「見せて、見せて、ね、見たい、見たい。」
私の心は震へた。紅吉は戀の爲めに、只一人を守らうとする戀の爲めに私の短刀で、私の知らぬ間に或夜竊に我と我が柔かな肉を裂き、細い血管を破つたのだ。私は何でもそれを見なければならない。
長い繃帶が一卷〳〵と解けて行く。
二寸ばかり眞一文字に透明な皮膚の切れ目からピンクの肉が覗いてゐる。もう血は全く出ない。
私は臓の動くのを努めて抑へた。そしてぢつと傷口を見詰めながら、眞直に燃える蠟燭の焔と、その暗薄い光を冷たく反對する鋭利な刀身と熱い血の色とを目に浮べた。
「何故こんなことをした？」
「……もう仕舞ひます。」と手をいつ込める。
「あなたは私を呪つたんだ、あの露西亞少女の……」私は不安の中に戰れた。
「呪ふ？　呪ふなんて。」

「血はどうしたの？　すすつて仕舞つた？」
「とつてあります。」
傷口は石炭酸で消毒された。私は又もとのやうに心を入れて繃帯した。
いつまでも〳〵その腕を離したくない。いや、腕としてかうして置くことが既に堪へられない。
私は自分の身體の震へるのに注意した。
神經はひどく緊張してゐる。總てのものが不可思議に考へられた。

午後ふたりは萬年山の事務所へ行く。
「あゝ、さうか、フアハハハハ」とよく笑ふ人の好い和尙が庫裡の方へ行つてから、紅吉は疲勞に堪へないと言ふ風に緣側に長大な身體を橫へた。
が、暫くしてから、ふと立つて黒板にこんなことを書く。

離別の詩

あたいの人形に火がついた
赤いおべべに火がついた
いとしや人形は火になつた
いとしや人形が火になつた

人形を買つて五十八日目の夕

紅　吉

らいてう様

そして又横になる。

青葉越しに向ひの家からはまだピアノの音が頻りに響いて來る。

私は「教會と魔術と鳥と」の原稿から眼を黑板に移し、次に兩腕を額の上に組んで仰臥してゐる紅吉を見た。

何か考へる時によくやる彼の癖だ。

今、一體何を考へてゐるのだらう。

五十八日目の夕？

「さうだ、さうだ。」

五十八日目の夕！

ふたりの紀念すべき五月十三日の夜から數へて。

私の心はまたもあのミイチイングの夜の思ひ出に滿された。

紅吉を自分の世界の中なるものにしやうとした私の抱擁と接吻がいかに烈しかつたか、私は知ら

ぬ。知らぬ。けれどあゝ迄忽に紅吉の心のすべてが燃え上らうとは、火にならうとは。

雨戸の隙から、朝の光が幽かに差込て來ると、紅吉は兩手で顏をかたく蔽つて久しく動かなかつた。

其日から紅吉は私の顏を眞面に見るのを避けるやうになつた。私の眼を恐れるやうになつた。

私の眼がたとへ遠くからでも紅吉の顏の上に止る時、彼は一種の光を眼の前に見る樣になつたのだ。……さうぢやない、さうぢやない、私が紅吉の頭と心とを愛する先きに彼は私を思てゐたからなのだ。………

「どうでした？　面白いでせう。」

いつか紅吉は私の机の側に座つて、「敎會と魔術と鳥と」の原稿の上に眼を漂はせて云ふ。

「ええ、可愛いもの。」

「あのピアノの音がこれを讀むのを大變助けてゐるのですね。」

こんなことを言つてはゐるが、私は紅吉の何か胸の奥で思つてるらしいのに怠らず注意してゐた。

不安な沈默が少時續いた。紅吉の右の眉の上は三度び神經的に動いた。

紅吉は何か忌はしい思想を拂ひのけるやうに額に手をかざして頭を振りながら、

「今、心配になることが二つある。」といふ。

「國民」に「所謂新しい女」が掲載されだし事はこの口からのことだつた。

紅吉は其記事に就いて眞面目に心配してゐるらしい。紅吉が書いた編輯室よりの記事が人々の好奇

心をそゝつたのはもとよりだし、又前日記者の訪問を受けたといふもので、たとへ紅吉の言つたことが書かれた譯でもないが、多少の責任は遁れないのを濟まなくも、迷惑にも思つてゐるらしい。

私はあらゆるものを眞面目に考へることの出來る紅吉を、新聞の記事の虚僞を以て滿されてゐるのを今更のやうに驚く紅吉を心に羨んだ。そして三四年前の自分を目の前に見るやうな氣がした。

この紅吉が、この率直な、子供のやうに單純な、疑ひ深くない紅吉が今後世間の色々な事に遭遇して、次第に信ずるといふことを失つて行くのかと、私は妙に悲しくなつた、淋しくなつた。

誰れかの言分ではないが、自分は新聞の記事に對して兩陛下と兩殿下の行幸啓の記事以外に殆ど信を置かない迄にいつかなつて仕舞つた。けれどその自分も「目下内訌を生じてゐるから近き中に分裂は遁れまい云々」の如き無責任な言語に對しては「無代廣告」になつていゝなどとばかり笑ひ捨てる譯にも行かない。内部を知る在京社員はいゝとして眞面目な愛すべき地方社員のたとへ一人にでも無益な不安を抱かせるのは罪だと思つた。實際目下の青鞜社は分裂の必要見る丈の程度にさへまだ發展してゐないのだから。

だといつて私は紅吉を咎めやうとはゆめさら思はない。本社に對する世間の誤解がどうあらうとも社員の批難攻擊かどうあらうとも、紅吉をよく知つてゐる私は、善と言はず、惡と云はず所有ものに好奇の眼を放つあの若々しいフレッシュな、絶えず躍つてゐるやうな純な美しい心、無邪氣な、大膽な、熱心な生一本な態度を認めてゐる私は、過去の自分の長所、美點を今に懷しいものに思ふ心にか

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

うした紅吉とかうも速に接近した私は、どうしてこれ位の些少の過失？を以て紅吉を咎める氣になれやう。たとへそれがいかなることであらうとも彼の長所、美點を枯すやうなことは斷じてしたくない。其發言、行動の自由を抑制して、彼の進歩、發達を妨けるやうなことはしたくない。

「退社してお詫びします。」

「馬鹿」

私の少年よ。

らいてうの少年をもつて自ら任ずるならば自分の思つたこと、考へたことを眞直に發表するに何の顧慮を要しやう。みづからの心の欲するところはどこまでもやり通さねばならぬ。それがあなたを成長させる爲めでもあり、同時にあなたがつながる青鞜社をも發展させる道なのだ。

私の少年よ。らいてうの少年よ。

私の爲めにあなたの身體の何處かに赤色を只一點つけることを忘れてはいけない。

あなたは或夜私の胸でかう囁いた。

「私はね、人の言ふことは聞かないけれど、らいてうの言ふことなら何でもきく」と。

その時私はかう答へた。

「きいて下さい。私の言ふことと、それから叔父さんの仰有ることを。」
あなたの叔父さんがこないだ赤色を使はなければものは發展しないと仰有つたのをあなたも聞いてゐた筈だ。

だが私が紅吉と共に心を惱ますのは紅吉の謂ふところの第二の心配である。
それは今朝紅吉の近頃の健康狀態に就いて、O氏が言つたことだ。
紅吉は一月ばから前からどうかすると柄になく力弱い、消え入りさうな咳をした。よく頭痛で倒れもした。動悸の烈しいことも、寢汗をかくことも私は知つてゐないぢやない。
そして益々尖つて行く神經を恐れてもゐた。
だから「ともかく高田病院で健康診斷をして御貰ひなさい。」とすゝめた。
O氏も私と一緒にすゝめてくれた。そして、自分に肺病の經驗のある處から年齢が年齢だから——侵され易い年齢だから「ほんもの」かも知れないなどゝ冗談も言つた。
けれど紅吉は、いつもの心臟病と脚氣なのだと信じやうとしながらもO氏の話で多少思ひあたる處がないでもなかつたらしい。
「明日乾度診察を受けに行きます。自分はどうでもいゝが、あなたに濟みませんから。今迄あなたにして來たことも取返しがつかないやうな氣がします。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私はあの不養生な紅吉が眞面目に自分の身體といふことに注意を向けだしたのを寧ろよろこばしくも思つた。

「ねえ、もうかうしてゐるのも今日だけのやうな氣がしていけない。」

首を上げて黑板の離別の詩を一寸見た、がすぐ又私の方に寄り添つて眼を落した。

「何故今日だけ。」と私は故と詰問した。

「明日診察を受けるでせう……すると、どつちかに極るでせう、ね、どつちかに。」

「さう。どつちかに極りませう。けれど自分にも分らない、どつちとも極らないやうな不安な狀態に置かれるよりもたとへよくにしろわるくにしろ判然した方が安心ぢやありませんか。」

「けれどももし何だつたらもう逢はない。逢へない。」

私は紅吉の大きな手を無言で握つた。

私には何かなしに明日の結果が豫想された。もしほんとだつたら、もしやほんとだつたら。秋の製作、自分の全力を打込もうとしてゐる秋の製作を前に控へてゐる紅吉は、この重い責任をまだ果さない紅吉はどんなに落膽しやう。

眼の中が急に熱くなつて來た。

せめて醫者の宣告だけでも直接にきかせたくない。

「私も明日病院へ行く。院長に一度逢ひたいことがあるから。丁度いゝ、診斷の結果はともかく總

て私が訊いて上げる。」
紅吉は別段逆はなかつた。
「人間になるのがいやになつた。」
暫くしてから、始めて戀を知つた紅吉は、戀を知つて始めて人間の切なさを知つたらしくふとこんなことを言ひ出した。
「私はいけない。私は困る。人間だから。」
「人間だつて困りやしない。」
「私はあなたと逢ふ。逢はないぢや淋しくてゐられない。」と小聲にいふ。「淋しい。」と訴へられたのは今日が始めぢやない。こんな場合自分はいつもどうしていゝか分らない。只紅吉の總てを製作に熱中させやうと努めるより仕方がなかつた。だが今の自分はいつもの教育者らしい態度で、又小母さんらしい態度で説法する氣にはどうしてもなれない。
「淋しい？どうした。」と言ひざま私は兩手を紅吉の首にかけて、胸と胸とを犇と押し付けて仕舞つた。
「いけない。いけない。」
口の中で呟いて顏を背けたが、さりとて逃げやうとはしない。
私は自分の身體に烈しく傳つて來る心臟の鼓動を靜にきゝ乍ら、小唄のやうに。
「ね、いゝてせう。あなたが病氣になれば私もなる。そしてふたありて茅ヶ崎へ行く。ね、私の好

きな茅ヶ崎へ。星の光る夜、ボートに乘つて、たつたふたりきりで烏帽子島の方へ漕いていく、沖の方へ、沖の方へと漕いていく、ね、いゝでせう。」紅吉は久しく顏を上げなかつた。

あたりが暗くなる頃、萬年山を出た。

四ッ辻で分れる時、

「ぢや明朝九時に病院へ行きますから。」

「承知しました。」と私は男のやうに簡單に力をこめた。

家へ歸るとすぐ子鳩を見る。左の眼は矢張り薄膜に蔽はれて、見えない。もうあの可愛いい黑い眼も二度と輝かないのかと私は悲しい。

片目の鳩！俄に片目になつた鳩！

不吉な考が私の頭の中を去來した。

夜、紅吉から來た手紙とハガキ總てを箱に入れ違へる。何と思つてか自分は知らない。

昨年の十一月三十日を始めとして今日まで、手紙廿九、ハガキ卅八。

あの忘れられない十三日の夜、あの夜の後、始めて來た手紙と速達の朱印あるもの二つ三つとを撰んで再び讀んだ。

手紙を見詰めて座つたまゝ其夜はとうと明けた。同性の戀といふやうなことを頻りに考へて見た。

手紙は大分長いものだが、今、私は其の中の二三を特にこゝに寫し取つて活字にして置く。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

御疲れと存じます。

紅吉は今朝三時から日記の方にかゝつて居ります。歸つてから十二時過ぎ迄は自分で自分を押へる事の出來ない程苦しい、苦しい事ばかり考へさせられて居りました。今朝の胸の痛さは別です。又昔の心臟病にでもとつつかまへられたらしい。自分で自分を捨てた弱い人間がひとりふへました。

私は青い上に直一層青くなりました。

紅吉の眼を見て、今朝から三人の男と一人の女は睡眠不足と斷定した、そして女はまたかういゝました神經衰弱だらうと。

けれど私はたしかです。昨夜は心ならずもの失禮を演じました。只貴女がまだ起きてゐらつしるものと信じて。どうぞ御赦し下さい。御家の皆さんにもよろしく。私一人の淋しい家は今夜氏神樣の本祭りです。お祭り提灯のついた紅吉の家の夜を見て頂きたい。私は私一身の重大な事件とそして病氣とを訴へて置きます。

今夜はお好きな御馳走をします。そして編輯の御手傳も致します。是非原稿全部と御用件皆とをもつて紅吉の家を訪ねて下さいまし。

夜を通してもいとひません、私は御手傳いたします。紅吉の原稿は是非今見て頂く必要があります。私は御伺ひしたいのですけれど、御樣子を伺つてゐますから御遠慮申します。痛ましく疲れた

紅吉は今夜來て下さるかも知れないといふ淡い樂しみて休んでゐます。如何でせう、淋しい家に來て下さい、今夜。

（この手紙をあけて黒い棒をひかれたら私はもう終りらしい。）

五月十五日朝　　　　紅　吉

らいてう様

…………………………………………

よく眠れといくらさとして頂いても私はもうだめです。私はとても貴女に會つてしまはなければ安眠など思ひもよりません。行くのは容易であるとの御言葉をたよつて最う一度かきます。御氣付き通り昨夜私は何しにも參りません、只幾分か心を落付けたいばつかりに上りました。けれど私の悶は一層激しくなりました。私は今夜とても眠られません、いくら、いくら貴女の御言葉でもこれ丈は御赦しが願ひたい。

私は今夜來て頂きたいのです、只、それぱかりです。

早く來て私を救つて下さい。（以下少し不明）

併し決して御無理にとは申しません。

重大な事を考へて私が明日迄落付けるものならあゝした手紙を出しません。

それでも私を苦しめて下さいますか。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私こそ疲れて死にさうです。かけません、私は只私の心で動いてゐるばかり。

五月十五日午後　　　　紅　吉

らいてう様

…………………………

今朝から全く私は眞面目に私の仕事について注意を集める樣になりました。

私は昨日あれから私の身體と誰かの身體が決して別々になつてはゐないと考へながら、春日町で乘換へもせず、只大膽になつて水道橋迄行きました。そして赤坂見付行に乘つて駿河臺下で乘換へして龜澤町行に乘りました。和泉橋から金杉迄何處をどう來たか解らない程に興奮しきつて。けれど決して疲れてはをりません。安心して下さい。私は全くたしかです。

きのふ圖書館の話がありましたから、今朝上野と日比谷と大橋に電話をかけて見ました。けれど上野には來て居ないとの返事で、日比谷は休みでした。私は全く失望しました。今夕食事を一緒に致したいと思ひました。それで、今朝、魚を料理して置いて只夕方を待つて居ましたが行先きがかうして解らない以上、只貴女からの此手紙に對するいゝ返事を得たく存じます、白雨の東京を去るについて麥酒もさし上げたいと存じます。私は白雨云々と書いて又いぢめられるかも知れませんが、御察し下さい。

そして今夜私は夕食をせずに待つて居ります。必ず待つて居ります。
どんなにしてもだめな時は仕方がありません、下谷の三九五三の〇〇に迄その旨傳へて下さい。
そして私は御手紙を後からほしい。只、我儘な子供の願を許して下さい。私は最も弱い貴女の子供と信じます。

五月二十日　紅吉

らいてうさま

……………………………………

涙が膝の上に落ちてゐます。私の手はこの筆がしつかり握れない程顫へてゐます。
その顫へてゐる手を、左の手でしつかり押へて私はこの手紙を書きあげて仕舞います。
「私はあなたを抱くことを、接吻することを欲してゐる、けれど孤獨のたのしさ、深林の靜けさを更に、更に欲してゐる。さらば、さらば。」
申上げたい事は澤山あります。此の胸に張り切つて居ます。
私は遂々黒い棒を引かれてしまつた。あなたから、あなたから。
けれど私の命は短かつた。私は、五月十三日の夜、夢の樣に實現した「私」をどんなに不安に思つたらう。その不安から生れたおどおどした悦びはどんなでしたか。恐らくあなたはそれを知つては下さりますまい。今、午後三時四十七分あなたの御手紙を見た。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「さらば、さらば。」

涙もかれよと泣きつゞけてゐます。

私の製作は、どんな悲しい階調を帶びてくるでせう。山に入る必要もいらない、私はもう凡てから離されました。

ピストルで打たれた紅吉は今死にます。

けれどあなたを恨みはしません。

未練らしい事を申すやうですが、私は、私はあなたの凡が全き勝利を得られる日を今から一層まちます。この手が顫へます、この手が、から顫へる。私の神經はズタ〳〵に切りさいなされてしまつた。

製作は、私の製作はあまり早く、私の戀してゐた、大切な人から離されてしまつた。子供は遂に死にました。

こんなに早く離されてしまつた私の身體は、こんなに尖つてきた私の神經は何事も常識的に搬ばせてくれません。

研究會にはもう出ません、私は又二度とあなたに逢ひますまい。逢へば泣きます、涙がにぢむ。眼がはつきり見えない程あたりがうるんでゐます。

今少し前私の身體の顫へと、熱さとに驚いて、今、御伺ひしたい樣に電話をかけては置きました

が、もう御目にかゝりますまい。
さよなら、さよなら。あなたの好きな生活をいつ迄も送つて下さい。
阿部先生にも、生田先生にも、最う御目にかゝれますまい。これから思出せるかぎり、二月十九日からのまぼろしと、追憶にふけりましやう。今、どつかに姿をかくさうとしてゐる女の出たことを斷つて置きます

四十五年六月三日　　紅吉

らいてう様

……………………………………

御茶の水で電車を捨てゝ一直線に高田病院へと急ぐ。
橋の中程の人影から、ちらりと見えたのが紅吉らしい。只一人の人を烈しく思ふ時、道行く總ての人の顔なり、姿なりがともすれば其人のやうに見える經驗から最初自分はそれを信じなかつた。十歩で紅吉なのを確めた。
けれど、ああ、
あの目ざとい、いつもの紅吉は今日はまだ私に氣付かない。
あの元氣のいゝ紅吉は今日は爪先ばかり見詰めて影のやうにユラ／＼と歩いてゐる。
時々右腕を眼の上に置くのは煮染み出る涙を隱さうとするのだらう。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私はもう何も聞くに及ばない。聞くに忍びない。今日の宣告の總てが分つて仕舞つた。

と同時に私はひどく後悔した。九時と約束しながら三十分を遲刻した自分をひどく心に咎めた。さぞ頼り無い人と思つたらう。私のやうなものを友達にもつた人は、戀人にもつた人は確に不幸だ。實をいふと早朝から讀書に耽つてゐた自分は、自分の思想に深く埋もれて仕舞つて、友情も、戀も、只一人の人の生死さへもどうでもいゝやうな氣にいつかなつて仕舞つてゐた。で自分から進んでした約束だのに、一旦電話て斷つたのを、又思い返して俄に家を出て來たのだから。

漸く紅吉は首を上げた。始めて私を知つた。けれど眼は悲しく濁つて動かない。不意の打擊に頭がぼつとしてゐるのだ。

「もうすんだんですか、少し遲くなつて濟まなかつた。」

「…………」

「院長は總てあなたに話して下さいましたか?」

ええ、もうすつかり極つて仕舞ひました。明日茅ケ崎へ行きます。」

ふたりは女子師範の前迄來た。

紅吉は南湖院醫局宛の添書を懷から出して「患者△△△△」と記した自分の姓名を指しながら「患者はいやてすなあ」と無理笑をして見せた。

私は事のあまりに早く極つたのを驚かずにはゐられなかつた。私の心は不思議に落着いて慰めの言

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

葉一つ出て來ない。

「ともかく何處か靜かな處て話しませう。」

「私はこれから獨りで何處かへ行つて仕舞います。あなたに言ふことが澤山あるけれど、もう言へません。いづれ手紙て申します。ほんとにすみませんでした。もう逢ひません。」と口早に言ふ。

「ぢやあなたはこれからどうするのです。」

「家へ歸つてあの屛風をズタ〳〵に裂いて死んて仕舞ひます。」

今、院長に秋の製作に從事することを禁ぜられたのは言ふまでもない。一雙の六折屛風は二三日前立派に出來てゐる。紅吉は八九の二月を文部省へ出品の大作に打込もうと決心してゐたのだ。

「今年の秋」の紅吉をどうか見てゐて下さい。「私の畫」をかく時が一番高潮しきつた時です。

と紅吉はよく私に言ひ言ひした。

私は悲しい。高潮の極度に達せずして半途にしてこんな打擊を受けた紅吉が悲しい。あゝまて思ひ詰めた紅吉に私は、死んでも畫だけかかせたい。美しいものを、素晴しいものをかゝせたい。

紅吉は無言て私のあとに跟いて來る。病院を出てから、何處をどう歩いて來たのか知らないらしい。

いつかふたりは水土橋迄來て仕舞つた。

「ね、私は矢張引返して院長に面會して來ます。そしてあなたの病氣の委しいことを聞いて來ますから。あなたは此處から電車て一先づ御家へ歸つて下さい。そして獨りて、あなたの部屋て、今日

のことを、それから今後のことを今一度よく考へ直して下さい。落ち付いてね。私は二時までに屹度御家へ伺ひます。屹度。ね、待つてゐて下さい。」

私は病氣の程度次第では製作を中止させたくないと思つたのと、今一つはこんな場合紅吉の側を離れずにゐて彼を慰め、彼の心を引き立てさせるやうにするのは自分にとつては寧ろ容易なことだけれど、それより只獨り突き離して、眞に只獨りの時を有たせて心行くばかり靜思させる方が彼のために更に必要だと考へたのでかう云つた。私の少年、らいてうの少年は又この位のことによく堪へ得るものであつて欲しい。私は人から慰められるとは大嫌いだ。私の少年だつて嫌いに相違ない。

紅吉は遂に私の言葉に從つてくれた。

私は安心して病院の方へともと來た道を戾つた。

やがて後から一臺の電車が來た。私は電車の中に目を凝した。紅吉は身を振ちて、遠く窓の外を眺めてゐるらしい。ともすれば涙に曇らうとする眼を車內の人々から避けてゐるのではあるまいか。後姿が淋しい。飴色の[illegible]も淋しい。

「あなたは今日から一の新しい戰鬪を開始したのだ。しつかりして下さい、あなたは何でも病氣に勝たねばならぬ。」

かう心の中に叫んだか、悲しさが急に胸をつゝかけて來た。

前日の萬年山でのやうな何處か不眞面目な、冗談半分な氣分はもう何處にも見出されなかつ

た。

「△△さんは肺結核です。」といふ莊重な院長の確信あるらしい宣告は寧ろ私の頭の奥底に氣持よく響いた。

こんな場合にも自分は八月の青鞜のことが忘れられない。今度は自分と紅吉が編輯の番にあたつてゐるのだから。

私は電車の中でモーパッサンの妻、其他の原稿に目を通して、句點など打つた。そして、かうなつては紅吉に手傳はせるのは可哀相だ、それ丈畫の方に集注させたい。今度の編輯は總て一人でやつて見やうなどゝ考へた。

家へ歸るとすぐ圓窓の部屋に籠つた。私は一炷の香を焚て紅吉の病氣の必ず全治することを、誓つて自分が治して見せるといふことを、專念に觀念したのだ。二時近くまでも。

私は次第に全治を信じて疑はないやうになつた。

やがて電話がかゝつた。

今叔父さんが來てゐられるからすぐ來てくれとのことだ。

二三の用事を濟せてすぐ出掛ける。

叔父さんにも御兩親にも初對面だつた。けれど紅吉が敬愛する叔父さんのことは紅吉を通して毎日聞かされてゐたから他人とも思へない。

御家の方々は皆紅吉に力を付けやう、病氣に打勝たせやうと努められた。そして茅ヶ崎行きや入院に對しては反對の意を表された。早速製作にとりかゝらせやうとするものらしい。

茅ヶ崎を愛し、南湖院と院長の人物を知つてゐる私はもとより紅吉の入院を最も安全な方法と信じてゐる。たとへ全快までじつと入院してゐない迄もこの病氣に就て無智な紅吉が多少の智識と養生法とを自得する迄入院の必要があると思つてゐた。のみならずあの松の青い、雲の美しい土地で頭だけ十分に練つて、いざ製作に着手するといふ日になつて一時歸京するのはさして困難な事でもあるまい。それにあゝした病氣になつて周圍の人達に堪へず人知れぬ氣兼ねをさせるのも可哀相なものだとも思つてゐた。

けれど私は不如意な自分の口舌を以て人を說くことの無益なのを知つて其時は只默してゐた。

金杉の停留所まで紅吉は送つて來てくれた。で、別れ際に、私は熱心にかう言つた。

「ね、明日茅ヶ崎へ入らつしやる時、是非お家の方をどなたか連れて入らつしやい。お父さんか、お母さんかね、其方が屹度よございます。一度茅ヶ崎と南湖院とを見て頂いて置く方が。」

「ええ、見れば屹度いゝつて言ひます。私はもう早く獨りきりの處へ行つて仕舞いたいんです。こんな病氣になつてだん／＼ひがんで行くのはいやですから。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

家へ歸つても紅吉のことばかり氣になつてならない。言ひたいことの澤山をお互に言はずに、言ふ機會を與へられずに別れたやうな氣がして心殘りでならない。瓦斯をつけて手紙を書く。

「初對面の人の前では馬鹿に臆病な私は言ひたいことも言はずに別れたのを今殘念に思つてゐます。」と書きだした。

「今日七月拾二日といふ日は私共ふたりにとつて紀念すべき日でした。私は今日の宣告によつて何だか新しい力を得たやうな氣がします。この事件によつてふたりの間は更に接近したのを私は感じました。私は自分を信ずるから自分の少年をも同樣に信じてゐます。私は肺病を恐れないものではない、けれどふたりの意力の大きさを信じてゐるから、世の人のやうに徒らに恐れてはゐません。」といふやうな文句を次ぎ〳〵と連ねて行く中に次第に興奮して、紙の上に涙がはら〳〵と落ちた。インキがそこにも、こゝにも染み出る。

突然、門のベルが鳴つて、使が紅吉の手紙を持つて來た。

「まるつきり裸體で放り出されたように、私は今迄一言考へちや涙ぐみ思ひ出しちや泣いてゐました。ね、私は一體どうしたらいいんでしよう、ね、私はどうしたらいいんでしよう。肺の初期も終りだと宣告された時、私は院長の前でもかまわずに涙を落しました。私は、本當にそうなんでしようか。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ね、私は、眞實に肺なんてしようか。

夢にも思つても見なかつた、あの恐ろしい肺になつたのでしようか、私はなんの爲めに私の肉を切つたでしよう、なにが爲めに私の血をすすつたので御座いましよう。

ね、私は、私はこんな短い運命に泣かうと思つてした仕事ぢやないのでした。

いつ迄もいつ迄もあなたを慕つて、あなたを戀して、そして、あなたからの大きな愛を受けたいばつかりにてした、ね、私は、生きて行きたかつたのです。だから肉も切りました、血もすりました。ね、愛されて行きたいばつかしに。

可哀そうと思つて下さい。

ね、可哀そうと考へて下さい。私は、今涙をためてかいてゐます。私は、もうあなたの室に、あの丸窓の下に行く事の出來ない、見るから可哀な少年になりました。

とうして宣告されたこんな身體を搬ばせられましよう。ね、私は、出來ません、どんな鐵面皮だつて、どんな馬鹿だつて、こんな宣告された身體を……あなた一人なら、まだしも……私の前途はまるつきり黒暗なんです。

つきはなたれた少年は、かうして只つた一人の人を守つて、戀して慕つて逝くのです。

私の周圍に私は非常なうたぐり深い目をして今朝から接してゐます。

私はだんだん神經が尖つて來ます。私は私は今一人離れて行かなけりや、一月たゝぬ間に死んでし

まいます。

いろんな今迄氣にもしなかつた氣がねと、注意とうたぐりを持つて來た私の見へて來る事がただ悲しい、ただ悲しい、ただ口惜しい。

別れるとき私はあなたに餘程さきかへそうと考へた事が有りました。

八月の青鞜の編輯は他の方に頼みますから。

なぜですか、なぜなんですか、私は、あなたに迄、ああした不安を抱かしたのが悲しう御座います。

私は、けれど決して、どうのこうのとは申しません、ただ宣告された私を悲しみ恨むより外仕方が有りません。

伊藤さんにても御依頼なさいまし、

宣告されたからには、私もあきらめております。隨分永い間色々無理をいつて困らせましたね、本當に私は濟まなく思ひます。

私は、どんな運命になつても、あなた、を忘れません、私は、私は、只、只、………ああ、もうかく事も出來なくなりました。

今日はいろいろ御心配をかけました。

御赦し下さい。なをつたら、なをつたら、一生懸命になつて勉强します、私の勉强があなたへの送り物なのです。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

あすのあさ茅ヶ崎へ行きます、母と、それて我儘な言分てすが、出來るなら、一緒に來ていただきたいのてす。

如何てしよう、ね、御都合は、

文部省の出品は、倒れる迄、やつて見せます。待つてて下さい、宣告された、放り出されたこの少年の、働きぶりを。

ね、一度は、あなたの愛を受けた事の有る、この少年の生と働きを。

そしてのち、少年の死を、見て下さい。病氣のなをる迄丸窓には行けなくなつた、どうしましよう。

寫眞をかして下さい。
今夜詩を作ります。
雨の日にかりました傘をおかへしします。
私が宣告されない前なら私が出るのですけれど。

らいてう様　　紅吉

こんな時、こんな手紙にぶつかつた私は終り迄讀むに堪へなかつた。

「御返事を待つて居ります。」と側にゐる下女が私の涙をあやしさうに、又見ては惡いもののやうに眺めながら言ふのが憎らしい。

「さう。いゝからあつちへ行つてゝおくれ。」私は今人目も構はず泣きたいのだ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

今すぐにも飛んで行つて、この感情を少年の胸に投げつけてやりたい。力の限り抱きしめて、血の出るほどの接吻がしてやりたい。

私は自分で玄關に出て、使の者にかう言つた。

「別に返事はいりませんから。これからすぐ伺ふと言つて下さい。」

其夜、一夜、紅吉は私の雙の腕の中に泣きながら眠つた。どんな夢を見てゐたのだらう、身體は幾度か物にでも駭いたやうに震へた。翌朝紅吉のお母さんと紅吉と私は茅ケ崎へ行つて歸つた。

其翌日の午後紅吉と私は皮の鞄を二個持つて又茅ケ崎へ行つた。紅吉は其日から茅ケ崎の人になつた。南湖院の入院患者になつた。

私の子鳩が死んだのは其日の朝だつた。

片目の子鳩！俄に片目になつた子鳩はとうと死んで仕舞つた。兩眼とも薄膜に蔽はれて。

けれど私は紅吉の御幣かつぎを恐れて決して、決して話さなかつた。

今もまだ紅吉はあの鳩が片目で鳴いてゐると思つてゐるのだらう。鳩の子を寫生して送つてくれなどゝ言つてよこした。

今この稿を書き終へる一時間程前、こんな手紙が茅ケ崎からまた來た。

毎日紅吉の手紙を讀むのを樂しみにしてゐる私はそのまゝこゝに寫し取る。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

午後一時からピリケをします。

ピリケつて、なんだか解らないので古越さんに聞きました、なんだか種痘によく似てゐるんださうです。

小母さんの室から晝食に歸へつて來ましたら待つて待つてゐた葉書が又、同じように床の上に置いて有りました。

私は毎日、ただあなたの便よりばつかり待つてをりました。

勝ちやんに、八月號の編輯のお手助けをよくたのむで出したのです、けれどきのふ斷りが來ました。私は、あつい時、一人て仕事をなさいますあなたの身體を思ひました、それで勝ちやんに願つたのです。

丸窓よりの線稿は全く私が有つたから書けなかつたんです、こんな病氣にさへなつてゐなかつたらと、大變すまなく思つてゐます。

拾一日の離別の詩、よもやあれが本當にこんな運命を作らうとは思いませんてした。

毎日呑氣なようで淋しい生活をしてゐます、只思ふ事と考へることと見るものは、定まつてゐますし、あの大切な大切な手紙は、毎日毎日讀むでゐます、床についてからの私は、只お察し下さいと申し上げて置きます。

けれど、私はもう茅ヶ崎の人となつてゐるのです、南湖の入院患者です。肺病患者です。

大切な、大切な、只一人よりない私の戀人から離れて、私の戀人だけぢやない、私の私の製作から別れて、秋の錦を織る事が出來ない樣な大馬鹿者になつてしまつたのです。

ね、私は小母さんから二三日前のよるこんな事を聞きました。らいてうは一つ物に集中してゐる。譬へば、戀を作つてゐる時には、全部そこに働いてもゐよう、けれども、今又、外に或る集中物が生じると、今迄、そこ迄作り上げてた戀でも、すつかり打捨てゝ、後ふり向こうともせぬ、又その後から思出そうともせぬと、

私は、小母さんにこそ元氣で接してゐます。けれども、その晩から、その事ばかり考へて、私のこれからと現在の病氣を引合せて泣いてゐます、もしそんな事が事實となつて出て來たなら、………私は、病氣が病氣ですから、もう我儘はいいません、そんな時の來るのが、あたりまへです、きつと、あたりまへです。

私は、あなたの言葉の通りに、あたりの人達と全く離れて、獨りで養生してゐます。

小母さんの家に行くのが今は、唯一の慰めになつてゐます、そして、あなたの話を一つでも澤山したり聞いたりして悦むでゐます。

今日茅ケ崎へ來てはじめて手紙と云ふものを書きました、肩が痛くなりました。

退院と云ふ遠い日迄、私はあなたにより外手紙はかきません。

今夜詩と俳句を送ります、表紙も同時に送れたらいいと思つてゐます、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

同じ愛光室の患者に今日あなたの話をきかされました、なんでもその人の伯父とか云ふ人が早稲田の文學三年で、あなたを心服してゐるんだそうです。

青鞜もよむでゐるんだそうです。

雲がきれいです。その内に朝の富士をスケッチして送ります、膝の上に原稿紙を置いてかいたのです。

心の中は、あなたで一ぱいなんです、
あんまり書くとおしいのです、
だから今日はよします、

十八日二時少し前　　紅吉拜

らいてう様

――らいてう――

編輯室より

■同人はもう皆んな次の九月號のことを考へて居ます。青鞜の一週年紀念號のことを。誰彦だつて子供ももう滿一ケ年になるのです。その間にどれ丈、どんな風に發育したかは、次號によつて明になるのでせう。私逹は何でも力一杯のものを見せたいと思つて居ます。この氣持のいゝ眞夏の最中を一生懸命になつてよい御作を御書き下さい。立派なものが出したいぢやありませんか。原稿は八月十五日までに願います。それより一日でも遲れると全く困るのですから。

■表紙繪も改めます。長沼さんが何か思ひ切つたものを書くと云つて居られます。

御家の事情て久しく筆をとられなかつた物集さんも九月から又活動されるさうです。豫告ばかりしてちつとも書かなかつた中野さんも九月こそは屹度だといつて居ます。頁數は倍にするつもりです。大凡二百頁。

■野上さんと木内さんの小說が本月號に掲載する筈でしたが、九月にとの御申越してしたから。紀念號がますく飾られる譯てす。

私は一策論を書かうかとも思つて居ます。けれどそれ迄に氣が變るといけませんから小さな聲で言つておきます。

■青鞜は誤植が多いので名高いさうです。最初は慣れないから〳〵と云つて居られましたが、もう滿一年にもなればさうもいへますまい。自分の子供のアラさがしも苦しいことだが、少し暇だつたから七月號の「同窓より」の中の誤植を拾つて見ました。

正誤

頁	行	誤	正
九二	四	北多かつた	所の多かつた
九二	六	經論	經綸
九一	一〇	思想てある、	思想家てある、
九三	一四	「手より力へ」貧乞政策	「手より口へ」の貧乏政策
九四	一二	落段	陷沒
九四	一二	浮化	醇化
九八	二	訴り	祈り
九九	六	道德評價	道德經驗
九九	七	知的評價	知的計算
一〇〇	四	尋逝	卅還
一〇〇	六	情念	情意
一〇〇	七	一般獨法	一段論法
一〇一	五	情意	情的
一〇一	七	よく	よし

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

一〇二　一五　三脚地　　立脚地
一〇二　一五　此自身　　氏自身
一〇二　一六　手まびしく、　手きびしく
一〇三　二　意識など　　意識ほど
一〇三　五　物義　　物我
一〇三　六　無規　　無視
一〇三　六　此の世界　　氏の世界

以上　誤植合計二十一箇所也

これを筆者と印刷職工と校正係に割宛てると、一人につき、七箇所也。

■青鞜は第一巻第一號から揃つてゐます。御望みの方には一部拾錢で御讓りいたす筈。但し創刊號に限り廿五錢。

■杉本正生氏の習作の五は編輯上の都合で殘念ながら他日に讓りましたから。

■新に入社なさつた方、小室常氏、野村香女氏、神近市氏、人見直氏

■日本の思想家がベルグソンの哲學に驚くなんて近頃の滑稽の一つかも知れません。西洋哲學より外哲學はないかのやうに心得てゐたバチです。あつちの哲學者にとつてこそベルグソンも新しいでせう、珍しいでせう、其主張の大膽なのに驚きもしたでせう。けれど東洋の哲學者にはあんまり當前すぎます。我々の祖先はあれ位のことならとうくの昔に承知してゐました。

■青鞜社は其日暮しの貧乏人です。いらない金のある方は御寄附をなさつて下さい。少しよりも大い方が結構です。

■編輯室であばれ廻つた紅吉はとうと流罪に處せられて今南湖の月に泣いて居ます。けれど、白雨といふたまには苦いこともいつてくれる親切な小母さんがそばについてゐてくれますから紅吉も仕合せものです。白雨と紅吉との近況は「南湖だより」で御承知が願いたい。

■私も編輯がすみ次第すぐ茅ケ崎へ行きます。南湖へ。この分では木曾行は中止になるかも知れません。Kさんと福島邊で逢へないのは殘念ですが、仕方がありません。他日を期します。御暇の方は茅ケ崎の方へ御話しに御出下さい。御遊びに。白雨も居ます。紅吉も居ます。生田先生もゐられます。

■今度の編輯室は私一人、全く一人きりだつたので、面白いことは一つもありません。笑ふことの出來ない私は一人ゐれば一年でも二年でも笑いつこがないんです。大きな聲を出すやうなことも一つもありませんでした。全く靜かです。只大粒な涙と汗の玉が時々流れるばかり。併し御安心下さい。私の心は大きな聲でいつも笑つてゐます。――R――

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

南湖だより

四瓜畑から、ヨタヨタと迷ひ込むだあの茶色の木彫りのような叔母さんの室の小猫は、七日目に遂々死にました。叔母さんは随分悲しむでゐました。死ぬ時に妙な苦しい泣聲をして、霞貌畑けに抱かれて死むで逝きました。その時私と叔母さんは、あの四疊半に寢ころむで出葬の眞似をしてゐたのです。眼をパッチリと開けて齒をきれえに出した小猫を見た時は、あんまりいい氣持もしなかつたのです。その夕方新聞に包むで海岸の砂原に埋めて來ました、小猫を埋めた砂原には、可愛いい河原撫子が淋しく咲いてゐます。

叔母さんは暑くなつたので困つてゐます。

近頃は毎日朝から夜八時頃迄紅吉の友達になつて色んな事をして遊むでゐます。

茅ケ崎の雲は本當にきれいです。私はあの雲と一所に氣持を合せて行きさへすればキット身體がよくなると信じてゐます。

夕方が來ると海岸に寢ころむで面白い歌を唄つてゐるのです。そして一番星を見出すのがこの上もない仕事にきめてゐます。

叔母さんは茶屋町に行くのにさへ丸く坊主にした、天香粉を持つて歩いてゐるのです。そうしないと歩けないそうです。

それをどうしたのか三四日前紅吉を連れて買物に行く途中で落してしまつたので、途中で大騒ぎをしました。

書くなつて叔母はいいました、けれども書きたいのです。叔母さんは、こんな暑いのに毎日熱心に獨逸語のお稽古をしてゐます。私がなにか聞いたり話したりすると「イッヒハーベン」だの、「オーヤ」だの「ノイン」だとか云つて澄ましてゐます。

きのふ夕方から叔母さんと「男一人」に行きました。(例の六月の靑鞜の叔母さんの俳句に有つた「漕ぐを習ひし馬入鮎漁の戻るさに」を間違へて「男一人」としたので、それから同人の間では馬入川を「男一人」と呼むでゐます。)

叔母さんの船頭で私のお客様。叔母さんの漕ぎ方の上手さ加減は云はぬが花。川で泳げる人だけより外にあんまり乘せてもらわない方が安全だと思いました。葦の眞中に掉さして三日月が眞白く輝いて來た時分迄唄つて歸へりました。

——午後二時、紅吉

遂々病氣になつた紅吉は、茅ケ崎に來てから叔母さんの言ふ事をよく聞く可愛いゝ子になりました。

あの有名な朝寢坊だつた紅吉は叔母さんの書いて呉れた規則を

神妙に守つて朝は四時から明るい太陽を眺めて居ます。

牛乳も嫌い、肉も嫌い、魚も卵もと凡そ血になり相なものを生れてから口に入れた事のなかつた紅吉も、命が惜いと言つて何でも食べてゐます、最も未だどんな味だかちつとも分らないさうだが――。

牛乳はおいしくなつたと言つて此頃は毎日三合宛飲めるやうになつたので赤味が出たと大喜び、實際さう云へば眼玉は牛乳で洗つた樣に劃然(くつきり)と潤ひのある涼しい光りと若やかさを持つて來た。紅吉は海と河とが大好きで叔母さんは毎日お供をしてゐる。昨日舟に乗せて若芦を滑き下ると夕暮の富士が夢のやうに浮き出てゐた。

紅吉は天下一品だと叫けむだ、それから紅吉は河が好きになつたのだ。馬入川を賞めたと云ふ事が叔母さんには大變氣に入つたらしかつた。

有名の紅吉が入院したといふので若い患者連は大分好奇の眼を尖らせてゐるらしいので紅吉も大變弱つてゐる。食量は叔母さんの一日分を一度に食べて、平氣で次ぎの一ピイを待つてゐる。

それだから入院してから四五日より過つてゐないのに今朝の檢量では入院當時より六百目增してゐた。この分で一月も進むで來たら汽車にも乗せられないだろうつて叔母さんが心配してゐる。

――白　雨――

――紅　吉――

寄贈書籍及雑誌

三田文學	モザイク
下町	早稲田文學
北方文學	心の花
みづゑ	シバキ
スバル	劇と詩
藝文	東洋時論
歌舞伎	ザンボア
紅塔	アラヽギ
六合雜誌	ホトヽギス
俳味	短歌
十善寶窟	學燈
女子文壇	新人
萬年艸	家庭週報

和泉屋染物店　木下杢太郎氏著　東雲堂發行

雑誌規定

○毎月一回一日發行
○定價一册金貳拾五錢——郵税壹錢五厘——
○原稿〆切期日は毎月十日限とす。
○前金購讀料(四ヶ月分)壹圓(六ヶ月分)壹圓五拾錢
(八ヶ月分)貳圓(十ヶ月分)貳圓五拾錢(一ヶ年分)參圓
○廣告料　(一頁)拾五圓　(半頁)八圓
○廣告は總て卷尾のこと、但し申込の順序に依る。
○振替貯金(東京口座一一六〇)に拂込まれたし
○郵劵代用は一錢切手に限る(但し一割増のこと)

明治四十五年七月三十日印刷納本
明治四十五年八月一日發行

東京市本郷區駒込蓬萊町萬年山内
青鞜社内
編輯兼發行人　中野初

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷人　島連太郎

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷所　三秀舍

禁轉載

發行所　東京本郷區駒込蓬萊町萬年山内　青鞜社
(電話下谷三七七六)
振替東京口座一一六〇番

發賣所　東京市神田區表神保町三番地　東京堂
電話本局　一一二三　二四八　二五五二　四五六一(小賣專用)
振替口座　二七〇

大賣捌　盛春堂、北隆館、東海堂、

RESTAURANT

AND

BAR

夕方から御涼すゞみ
がてら御出て下さい

日本橋區小網町鎧橋脇

メイゾン

鴻の巣

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

復活

トルストイ伯著
内田魯庵氏譯

上巻（三版）正價金壹圓五拾錢
下巻（再版）正價金壹圓八拾錢

菊判函入高雅裝釘
郵稅各金拾八錢

名著は久ふして
益々光輝あり
復活は百世不磨
の大文章なり
現代の反映と
杜翁の教訓とは
皆收めて此小說
の中に在り。

東京日本橋通・大阪心齋橋筋・京都三條通

丸善株式會社

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

心の花

第十六卷　八月號　第八號

七月十日の記　佐々木信綱
ゼネバの湖畔より　チエンバアレン
風流と質素　芳賀矢一
聖彼得保と伯林　長　紅雪
古今集の修辭　次田潤
五月の夜（イプセン）　田野青煙
郊外の夜の歌（サマン）　竹友藻風
詩　柘榴　川田順
わざをぎん　片山廣子
繃帶　木下利玄
支那の旅にて　前田利定
竹の屏臺　角鴎東

定價一部金十三錢・前金半年七十五錢・一年一圓四十錢税共

東京日本橋區本石町一ノ一　竹柏會出版部
振替口座東京三〇〇〇番

月刊藝文雜誌

明治四十五年八月號　八月一日發行

定價一部郵税共二十二錢。半年分一圓廿錢。一年分二圓卌錢

「藝文」は京都帝國大學内京都文學會の機關雜誌にして東西兩洋の學術文藝に對し最も謹嚴深刻の批判を下さむとするものなり

「イラン」語族の民衆が中央亞細亞並に極東の地に及ぼせる影響　ポール、ペリヨー　文學博士　榊亮三郎譯

布留の能　文學士　吉澤義則

アルフレッド、ビネー　文學士　野上俊夫

人生の傍觀者　文學士　成瀬無極

遊戯としての社會生活　文學士　高田保馬

山梨稲川の詩　文學士　鈴木虎雄

能樂の源流を論ず（承前）　友枝照雄

當世こうた揃（附錄）　文學博士　藤井紫影

布留の能（コロタイプ）　口繪

書籍一割引（書目進呈）　鷄聲堂書店

發行所　東京小石川原町六　振替東京一三五三　電話番町二六〇八　鷄聲堂

モザイク

毎月一回一日發行

一册定價貳拾五錢

八月號要目

快血……水島爾保布
夏蜜柑の皮と犬……山本露葉
春の目ざめ（ウェデキント）……野上臼川
譯詩……秋元蘆風
西瓜……藤井伯民
春のない國……昇曙夢
將來の歌劇……伊庭孝
寫眞……五十嵐禎夫
バテレンの女……內田廻瀾
七月の末……モザイク同人
表紙繪……在田稠
裏繪……廣島新太郎

東京市下谷區中根岸町六九　モザイク社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

女子文壇社發行書目

●東京市京橋區大鋸町二番地

（振替口座第壹七貳九番）全國書店取次販賣●

女子文壇叢書 第壹編

前島優梨子著

町むすめ

八月一日發賣

▲全一册讀切寸珍美裝 正價三拾錢 送料六錢

女性の作物と云ふ事を最も明かに示せるものは前島優梨子の小說となす、優梨子の小說には女性らしき同情あり、女性らしき理解あり、彼女の作れる多くの短篇小說は、一篇毎に、それ〲〵異りたる人を引きつける力ありて、讀めば讀むほどしみ〲〵と人生の味ひを感得せしむ、世に閨秀作家を以て標榜する者少からずと雖、多くは其名ありて、其實空し、此處に其名は知られずとも、其實力の充實せる若き婦人作家、前島優梨子の處女作を一般の讀書社會に推奬するの機會を得たるは吾人の誇とする處なり。

八年八號 八月普通號發行

女子文壇

毎月一回 一日發行

定價	特別號三拾錢	送二錢
	普通號拾五錢	送一錢半

本誌は毛色の異つた無類の女學雜誌です、若い人達に持て囃されて居ます、論より證據、實物御覽下さい

八月一日 初號發刊

少年少女 お伽世界

▲毎月一回一日發行

▲石版寫眞版挿畫頗美

價一册七錢 送料五厘

價が廉くて、綺麗て爲になつて、面白い、こんな雜誌は外にありません、百聞は一見に如かず、最寄の書店にて實物を御覽下さい。

▲横瀨夜雨先生著 諸名家高評

再版 夜雨集

全三百頁 特製八十錢 並製五十錢 各送料六錢

●女子美文作法 全 特價二十錢 送料四錢

●新文章 全 特價拾錢 送一錢五厘

●娘時代 全 特價拾五錢 送一錢五厘

●女子遊學便覽 全 特價十五錢 送料四錢

▲佐々木邦先生著

再版 二人やんちゃん

全一册 武田氏密畫數葉 正價卅五錢 送料六錢

峽灣

第貳

八月一日發行　定價貳拾五錢

ゆめみがちの女（摸倣）　矢口達
影法師（小說）　宮本諄
忰の日（小曲）　平井芳郎
夜（脚本）　黑田玄一
月と神話（研究）　小川清彥
文藝改造論　山本朝太郎

東京市牛込區下戶塚町十五番地
峽灣發行所

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

斯道唯一の演劇雜誌

歌舞伎

毎月一回
一日發行
一冊金二十五錢
郵税一錢五厘

六冊前金郵税共金一圓五十錢
十二冊前金二圓八十錢

八月一日發行第一四六

作家、俳優、舞臺監督……島村抱月
「鴉の群」と「巴里の女」及其著者……和田魚平
エボン河のほとり……坪内士行
默阿彌著作解題……河竹繁俊
文藝協會試演……佐々木信綱
バンドマンオペラ座……松居松葉
土曜劇場の「飛行機」……吉田白押
「朝顔日記」の型……鈴木春浦
歌舞伎座の二番目……巽の女
浮名巽羽織中裏……中村歌右衛門
戲曲「戀愛三昧」（シユニツツレル作）……鷗外譯
戲曲「僧院」（フエルハアレン作）……鷗外譯
「戀の洞」茶譚……山崎紫紅
「江口の君」に就て……右田寅彦
常盤津のオペラ……青々園
「辨慶上使」……竹の屋
第二舞踊研究會を見る……きぬ子
七月の脚本界……川村花菱
帝國劇場通信……秋海棠
市村座と有樂座の活動寫眞……吉山旭光
劇談會——劇壇時事——劇界一覽
附錄脚本「骸骨の舞」……倉田啓明

本郷切通坂町
報知社内
歌舞伎發行所
電話下谷二四八三番
振替口座東京一八一〇六番

毎月一回 一日發行

詩と劇

特價一部 金參拾錢

特別戲曲號

○女優論（評論）……楠山正雄
○最近の英國劇壇（評論）……市川又彦
女一人（氣分劇）……川村花菱
人形岩（史劇）……川瀬喜内
歌劇……福田有作
死（飜譯）……秦豊吉
祭の夜に（氣分劇）……中木貞一
情夫（社會劇）……服部塔歌
Dialogue……丘草太郎
自働車と指輪（五分劇）……倉富砂邸
○露國文壇の代表作家（評論）……播磨楢吉
○帝劇・バンドマン・土曜劇場・合評……同人
○舞臺裝飾論（論文）……エレン、テリー

發賣所 東京市神田區神保町 東京堂
編輯所 東京市小石川區雜司ヶ谷町 劇と詩社

大賣捌 東海堂 北隆館 盛春堂 上田屋 良明堂 至誠堂

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

■八月號

ザムボア

定價金二十五錢
送費一錢五厘

高村光太郎氏　長田幹彦氏
永井荷風氏　仲田勝之助氏
木下杢太郎氏　佐々木繁氏
吉井勇氏　きしのあかしや氏
菅野二十一氏
三木露風氏

（以上諸氏の小說、戲曲、翻譯、詩歌を收む）

新刊

木下杢太郎氏著　**和泉屋染物店**　定價金壹圓　送費八錢

故石川啄木氏著　**悲しき玩具**　定價五十錢　送費四錢

森川葵村氏著　**夜の葉**　定價六十錢　送費六錢

白秋、露風二氏　**勿忘草**　定價三十錢　送費二錢

近刊

北原白秋氏著　**桐の花**

吉井勇氏著　**水荘記**

若山牧水氏著　**死か藝術か**

三木露風氏著　**白き手の獵人**

■■■

發行所　東京市京橋區南傳馬町三丁目（振替貯金東京五六一四）　東雲堂

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

八月一日發行

アララギ

第五卷
第八號

悲しき玩具を讀む……左千夫
七月の歌壇……千樫
思ひいづる折(二)……玉男
裾野……千樫
金槐集私鈔……茂吉
現と幻……梨鄕
折にふれて……茂吉
信濃の歌……諸同人
童馬漫筆……茂吉

○定價一部拾五錢○半年八拾五錢○一年壹圓六拾錢

東京市本所區茅場町三ノ十八　東京根岸短歌會

詩歌

價貳拾錢　八月號　送料一錢

■砂　水野葉舟
■山は、川は、　内藤晨露
■蜻蛉　廣川樂
■水刑　尾山篤二郎
■月の出　柳澤健
■悲哀の地　梶秀也

すふるんくす（オスカアワイルド）……山村暮鳥譯

短歌

佐藤嘲花　新辺知男　濱田柏羊
熊谷武雄　奥川夢郎　大野鹿嘶
樋渡花明　小澤紫紘　小谷清子
逸見義亮　寺井萩夢　田村飛鳥

■歌數十首
■七月の歌壇　前田夕暮

社友募集　白日社清規往復葉書にて申込るべし

東京神田表神保町　東京堂發賣

陰影

前田夕暮氏著
正宗得三郎氏裝

近刊歌集

■八月中旬發行

氏の歌は鋭く深くして最も現實的色彩に富む。氏の歌は新らしき木の實の如く、日光を反射したる樅の若葉の如し。讀者の心を刺戟し元氣せしめ、瞑想せしめずんば止まじ。

集中の歌六百、氏が第一歌集「收穫」以後の作中より特に精選せられたるすべてこれ氏が自信深き作ならざるはなし

四六版、裝幀は最も意を凝らしたり、

■定價金七拾五錢　送費六錢

東京市外西大久保　白日社發行

スバル

八月一日發行
第四年第八號

定價金參拾錢
郵稅壹錢五厘

小説

脣……水上瀧太郎
いてふ……江馬修
死の勝利……石川戯庵譯
わんぱく……五百歌庄二郎
目算……北尾夕街
滕子さん……長島豊太郎
あくび……江南文三
雁……鷗外

詩

さかづき……竹友藻風
じぶしいの歌へる……出野青煙
洪水の前夜の Reverie……福士幸二郎
小米櫻……邦枝完二
友の妻……高村光太郎
烟火……水野葉舟

椋鳥通信○消息○紹介○裏畫○歌等

東京神田北神保町二 發行所 昴發行所 電話本局四二六四

蕗の葉の秋待顔や羅漢辻　支考

俳味

八月號

俳諧の現位置……（卷頭語）
西鶴の俳句……鑁庭夏村
女子と俳句……巖谷小波
蕪村と漢學（其六）……久保天隨
俳諧七部集總論（承前）……萩原蘿月
京城より……鶴岡江村
顏洗はずの記……長尾素枝
秋の雲……（懸賞俳句發表）
怒……（懸賞文章發表）
通り雲……レモン法師

要目

私解芭蕉の發句（十二）……沼波瓊音
「しろ椿」を讀む……後學生
桃葉集を讀みて……一記者
哲學堂參拜記……嗚呼生
旅行と繪葉書と印譜と……福原雨六

附録

竹齋物語……
口繪　寫眞版
繪本世上の物競の一部……（初代豊國筆）
諸家の自署……

毎月一回一日發行

定價
一部金拾五錢
郵税壹錢
半年分前金郵税共金八拾參錢
一年分前金郵税共一圓六拾八錢

發行所
東京市本郷區西片町十番地ろ九號
俳味社
振替口座東京三四三四番

法外ノ教授料ヲ貪ル
詐僞的會ト同視スナ

通信教授
催眠術極意

入會希望者ハ先ヅ説明規則書ヲ要求セヨ

大阪東區生玉
帝國神秘會

文藝クレナヰ雜誌

會員大募集

雜誌

雜誌「くれなゐ」は毎月一回一日發行會員の作品は全部掲載し印刷鮮明體裁優美也

くれなゐ會濟規

一、本會は篤實なる文藝の研究を以て生命とせる者の結社也
一、本會は會員の作品を蒐め毎月一回雜誌くれなゐを發行し又時々文集詩歌集等を出版して會員に頒つ
一、本會は時々會員相會し研究會茶話會を開催す
一、會員たらんとするの士は入會の際會費三ヶ月分以上を添へて申込まる可し會費は一ヶ月拾錢とす
一、原稿は種類を擇ばす有らゆる文藝の創作品を歡迎す。一行十八字詰行數は隨意とす
一、原稿締切は毎月十二日と定む

會費

會費は振替貯金により（「大阪一三〇九七」田宮薫）宛に拂込まるべし入會者には會員證を呈す

雜誌大改革

大阪市東區生玉町
クレナヰ會

大阪出版

短檠

毎月一回
八日一月

總日本紙
ワサ印刷

八月號

詩

概　國枝史郎氏
夜　今井白楊氏
信條　百田楓花
はな唄　武田正憲氏
生は靜なり　FONTAINAS　宇野浩二氏
挽歌　段谷秋洋氏
鋸屑　鍋井克之
華慨　西半七
夜　BAUDELAIRE　秋山愁人氏
落人　久世勇三

版畫

お初德兵衛（木版三度）　久世勇三
鋸屑（自畫像、木版）　鍋井克之
たまのり（木版）　上田曉氏
表紙　鍋井克之
木版彫刻　伊勢竹居氏

一部十五錢　送料四錢

■

短檠社主催
第一回展覽會（九月）

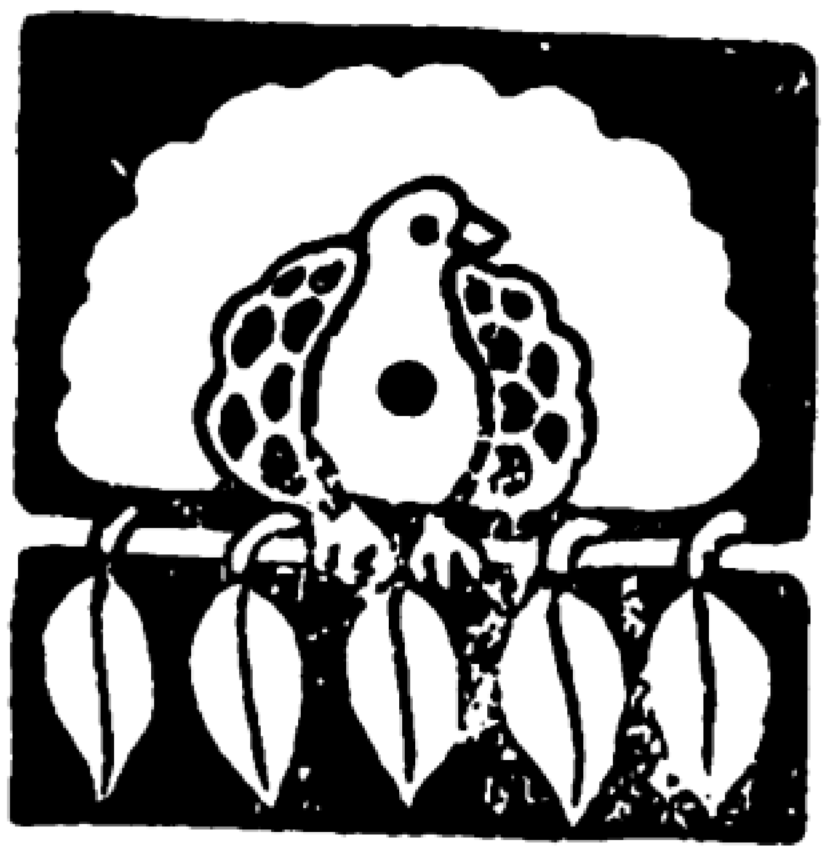
詩集 **夜**

百田楓花氏著

既成發賣
三十五錢
送料四錢

發行所　大阪東區内久寶寺町二丁目　電話南一八〇三番　短檠社

月刊美術雑誌



みづゑ

第九十號

八月三日發行

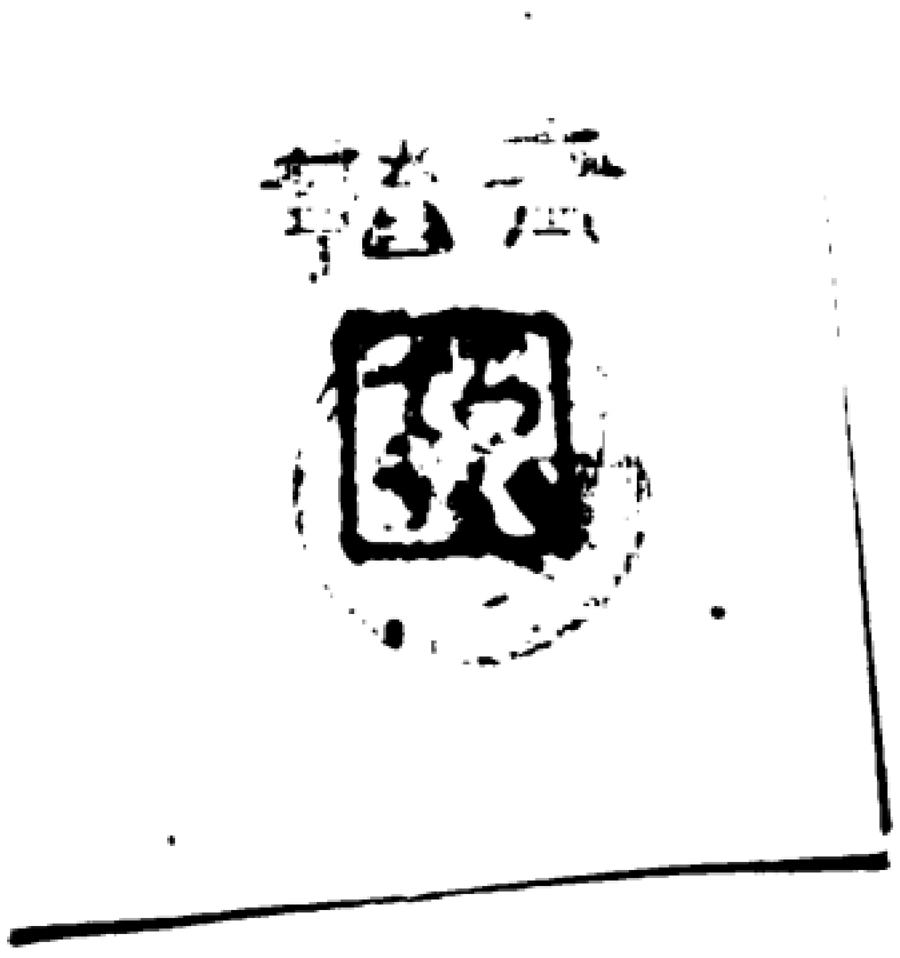
郵税共金二十五錢

水彩畫を描く人は勿論愛好せらるゝ諸君は坐右に本誌を缺く可らず

本誌は本邦最古にして且唯一の水彩畫研究専門雑誌なり

赤い頭巾を冠れる子供（水彩畫原色版）……南薫造
背景の下繪（同）……故大下藤次郎
朝日の窓（同）……吉田ふじを
ワンサンスの池（同）……石井柏亭
其他寫眞版數葉
素人へ……齋藤與里
日本畫と西洋畫の區別……中村不折
劇の背景（二）……山崎紫紅
忠實と不忠實の寫生……戸張孤雁
英國水彩畫家評判記……石川欽一郎譯
玩具より受くる國々の色彩……磯萍水
綴三脚物語（五）……鵜澤四丁
遞信省博物館創立十週年紀念展覧會を見る……赤城泰舒

發行所　東京小石川關口駒井町三　振替口座東京三九六三番　春鳥會



昭和44年 3月15日発行　【第3回配本】

青　鞜　第 2 巻（第2分冊）

編 著 者	平塚　らいてう
発 行 者	藤 原　正　人
発 行 所	(株)明治文献
印　　刷	正 明 印 刷
製　　本	(株)三高製本

【分売はいたしません】　定価 3,800円

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ASN
PER
PL
756
S45
v.2
no.8

University of Colorado at Boulde[redacted]
[redacted] 6746204

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

明治四十五年八月一日發行（毎月一回一日發行）第二卷
第三種郵便物認可 第八號